一般社団法人
日本肩関節学会
Japan Shoulder Society

Newsletter
19
2023.02

目　次

●新理事長あいさつ …… 2P
●新理事・新監事就任あいさつ …… 2P
●新代議員あいさつ …… 7P
●第 49 回日本肩関節学会学術集会を終えて ……13P
●第 51 回・第 52 回日本肩関節学会学術集会のお知らせ ……15P
●「肩関節外科医を志す人たちへ」―肩の魅力を語る ……15P
●学術論文紹介（第 35 回高岸直人賞基礎・臨床論文） ……17P
●海外留学だより ……19P
●委員会報告 ……22P
・雑誌「肩関節」編集委員会
・国際委員会
・高岸直人賞決定委員会
・社会保険等委員会
・教育研修委員会
・学術委員会
・広報委員会
・倫理利益相反委員会
・定款等運用委員会
・リバース型人工肩関節運用委員会
・日本肩の運動機能研究会運営委員会
・選挙管理委員会
・学術集会検討ワーキンググループ
・50 周年記念編纂委員会
・用語委員会
●前理事長あいさつ ……35P
●第 50 回日本肩関節学会学術集会　会長あいさつ ……37P
●事務局からのお知らせ ……37P
●編集後記 ……38P

新理事長あいさつ

一般社団法人　日本肩関節学会　理事長　菅谷啓之

2022年10月6日、一般社団法人日本肩関節学会の第5代理事長を拝命いたしました菅谷啓之です。2024年に50周年を迎える伝統ある本学会ですが、2014年に一般社団法人となり、初代井樋栄二理事長、第2代玉井和哉理事長、第3代柴田陽三理事長、第4代池上博泰理事長の後を受け、第5代の理事長を拝命いたしました。本学会の歴史の重みと今後の重責を考えますと身の引き締まる思いですが、誠心誠意、本学会の発展のために全力を尽くす所存でございますので、皆様、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

日本肩関節学会では従来、国際委員会を中心に国際化を進めてまいりましたが、2020年に発生したCOVID19による世界的パンデミックにより国際交流が完全に閉ざされておりました。この間、パンデミックによる怪我の功名とも考えられるvirtualミーティングが盛んにおこなわれるようになり、実際に現地を訪れることなくインターネットを用いた会議は当然のツールとして全世界で活用され、パンデミックの完全終焉後もこの叡知は今後もずっと活用されるでしょう。しかしながら、国際交流の大きな目的の一つはfriendshipの醸成であり、このためには現地に赴いて直接face to faceでの議論と会食が不可欠です。そのような中、パンデミックの鎮静化と共に国際交流も再開されつつあります。従来まで一方通行であったASESとはexchange programとなり今秋初の受け入れをKSESと共に行いました。また、中断していたSECECとASESへのフェローの派遣も再開いたしました。今後もこれらの国際交流は積極的に進めていきますので、学会員の皆様には積極的にこれらのシステムを利用して頂きたいと思います。

2022年10月の本学会時に、新たに19名の代議員が誕生し総計82名となりました。一般社団法人日本肩関節学会の目的である肩関節外科学の進歩・普及を進めていくためには、代議員の業務は大変重要になります。それぞれの委員会を通して、是非とも本学会発展のためにご協力をお願いする次第です。先達が築かれました本学会の伝統を守りながら、未来へ向けて一層の発展を目指していきたいと思っております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

新理事・新監事就任あいさつ

副理事長　橋口　宏

この度、伝統ある日本肩関節学会の理事として三期目を務めさせて頂くことになりました。また、今期は菅谷啓之新理事長のご推薦により副理事長を拝命しました。御支援を頂戴致しました先生方の負託にお応えできますよう、可能な限り努力を傾注するよう心掛けて参りたいと存じます。

基礎医学から診断・治療まで医療は目覚ましい発展を遂げ続けておりますが、残念ながらそれを支えるべき医療経済的側面は十分とは言い難いのが現状です。御存知の通り、外科手術において一つの手術野で複数手術を行うことは一般的であり、肩関節外科においても様々な手術を併せて行っております。当然のごとく、複数手術にはより高い技術を必要とし、手術時間も長くなります。本学会社会保険等委員会では、肩関節手術における関節鏡視下手術や複数手術を中心に診療報酬改定の際に要望を行い、関節唇形成＋腱板修復、腱板修復＋腱固定術などが新設されました。今後も肩関節手術の診療報酬改定に努めていきたいと存じます。

また、本学会年会費には「Journal of Shoulder and Elbow Surgery」の購読料が含まれておりますが、最近の歴史的なペースでの円安基調により購読料支払金が大幅に増加し、学会財務を圧迫する可能性が懸念されております。財務改善のためには、支出の削減も当然ですが、何よりも会員数の増加が最善の策であるとされております。財

務担当理事として財務改善に努めながら、肩関節に興味を抱けるような魅力的なコンテンツを発信し、学会員増加にも寄与できればと考えております。

社会保険等委員会、財務委員会担当理事として、さらには業務執行理事である副理事長として菅谷理事長をサポートし、本学会の発展に微力ではありますが引き続き尽力していく所存です。

今後とも諸先生方からの御指導・御鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

理事　伊﨑輝昌

この度、日本肩関節学会理事（3 期目）を拝命いたしました伊﨑輝昌でございます。皆様から多大なご支援を賜りましたことに感謝申し上げますとともに、負託にお応えできますよう全力を尽くす所存でございます。菅谷啓之理事長のもと、今期も高岸直人賞決定委員会と定款等運用委員会を中心に関連委員会との調整を行い協働して参ります。

高岸直人賞は近年、優れた英語論文が審査対象となっております。45 歳以下で過去の受賞者を除く当該年の学術集会発表論文から選考を行いますが、応募規定にある学術集会抄録締め切り前に雑誌掲載された論文の扱いについて検討を進めて参ります。2022 年度より運用が開始された国際論文奨励賞は、3 名が受賞対象となり社員総会で表彰されました。公式英文雑誌投稿を奨励する良い機会になったと考えております。新設された顕彰制度であり、運用開始後 2 年を目処に制度を検討することが付帯されています。名称、対象雑誌などを含む諸課題について検討を続けて参ります。一般社団法人の理事任期は 2 年です。日本肩関節学会では任意団体時の幹事任期を準用して、理事在任年数は 6 年を限度として運用しております。理事会としては継続性のある学会活動と活性化のためには在任年数の延長が必要と考えております。「重任」または退任後の「就任」について検討して参ります。

これまで培われてきた本学会の伝統を継承し、さらなる発展ができますよう努力する所存でございます。なにとぞご指導ご鞭撻いただきますよう、よろしくお願い申し上げます。

理事　菊川和彦

この度、伝統ある日本肩関節学会理事（2期目）を拝命いたしましたマツダ病院の菊川和彦でございます。皆様から大きなご支援とご協力をいただき、大変ありがとうございました。1994 年本学会に入会して 28 年、2013 年評議員（現代議員）に就任して 10 年が経過しました。理事1期目は教育研修委員会、50 周年史編纂委員会を担当いたしましたが、2 期目はこれに加えてリバース型人工肩関節運用委員会の担当させていただくこととなりました。

教育研修委員会の主な活動は、肩関節の基本事項を学ぶ研修会（学会会期中に開催）と技術を学ぶキャダバーワークショップの開催です。コロナ禍のなか一時中断していたキャダバーワークショップは、後藤委員長ほか委員会の皆様のご尽力のおかげで、2021 年同様、2022 年も無事に開催することができました。本学会は、諸先輩方が若手医師に厳しくも暖かい指導、教育をしてきた素晴らしい歴史があります。今後も、次世代を担う若手医師が優れた研究や臨床ができる礎になるような研修会、キャダバーワークショップの企画、運営を企画し、運営したいと考えています。

50 周年史編纂委員会は現在活動を開始したところです。世界で最も歴史がある本学会の良き伝統を再認識し、現在、学会が取り組んでいるプロジェクトや日本の優れた点を世界に発信する意味でも 50 周年誌の作成に全力で取り組んでまいります。

リバース型人工肩関節運用委員会は、「RSA 講習会におけるガイドライン説明」と「ガイドライン逸脱症例あるいはガイドラインに記載のない症例の相談」を中心に活動しています。ガイドラインについての疑問点や RSA 適応に迷う症例がございましたら遠慮なくご相談いただければと思います。

浅学非才の身でありますが、伝統ある日本肩関節学会の発展に少しでも貢献できるよう誠心誠意、努力いたします。今後ともご指導・ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願いいたします。

理事　北村歳男

編集委員会および倫理･利益相反委員会の担当理事を拝命しました北村歳男です。担当理事となる編集委員会には、委員として 2013 年から所属し 10 年が経過します。編集委員会の担当のご指示をいただいた際には気持ちが引き締まる思いがしました。また倫理・利益相反委員会については法律が絡むため、厚生労働省の指導内容を学んでいるところです。いずれの委員会にも心を引き締めて仕事を全うしていく所存でいます。何卒宜しくお願い申し上げます。

私は鹿児島大学を卒業後、1988 年に熊本大学整形外科に入局し、1992 年に日本肩関節学会に入会しました。日本肩関節学会とともに 30 年が経過します。大学院卒業後 1998 年より英国 Royal National Orthopaedic Hospital に肩関節 unit の臨床フェローとして 2 年間学び、帰国後も肩関節疾患を中心にした仕事をしています。日本肩関節学会の委員会活動への参加は 2013 年より評議員（現代議員）として、40 年史編纂委員会　高岸直人賞選考委員会　編集委員会　広報委員会の一員として委員会活動を勤めて参りました。とくに広報委員会では委員長を長く務めたため、多くの先生との出会いがあり、広い視野を持つことができました。深く感謝しています。また肩における研究テーマは腕神経叢の牽引であり、臨床では腕神経叢の牽引による胸郭出口症候群、並行して留学中から非外傷性肩関節不安定症、20 年前からは外傷性脱臼に対しての様々な保存療法を積極的に取り組んでいます。いずれも 20-30 年の長い研究となり地道に志を持って継続しています。これからも日本肩関節学会と会員の皆様のために努力をいたす所存でいます。何卒宜しくお願い申し上げます。

理事　高瀬勝己

この度、一般社団法人日本肩関節学会理事に 3 期目の選出をしていただきました東京医科大学整形外科の高瀬でございます。理事在任時でありました 2022 年 10 月には、第 49 回日本肩関節学会を神奈川県横浜市にて主催させて頂きましたことをこの紙面をお借りして感謝を申し上げます。今回の理事再任により、学術委員会（3 期目）および学術集会検討ワーキンググループ(2 期目)の担当理事を拝命致しました。学術委員会として過去 2 期 4 年間では､「凍結肩に関するアンケート調査」､「肩鎖関節脱臼におけるアンケート調査」を行い会員の先生方の貴重なご意見を参考にした 3 編の英語論文を作成し JOS、JSES International に掲載させて頂きました。2022 年 6 月には「広範囲腱板断裂に対する手術療法に関するアンケート調査」を行い、多くの貴重なご意見を先生方より頂きました。現在、先生方のご意見を委員会内で検討し論文作成に向けて鋭意精査を進めてところです。また、同時進行として「MRI 画像における Goutallier 分類の信頼性におけるアンケート調査」を行うべく､委員会内での綿密な検討を行っております。データ共有における倫理規定の内諾を得るのに少しく時間を要しておりますが、2023 年の早い段階に先生方に通知をさせて頂くことを予定しております。委員会内では、会員の先生方に今後の研究や診療の一助となるように、また日本発信のデータを海外に報告することを目的として、様々なテーマを検討し今後もアンケート調査を継続したいと考えております。質の高いデータおよび論文作成には、先生方の貴重なご意見が必須であります。先生方には多大なご苦労をおかけ致しますが、何卒ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。また、学術委員会に是非検討してほしいテーマがありましたら学会事務局に連絡をしていただければ幸いです。

若輩者ではありますが、今後の日本肩関節学会の発展に少しでも寄与したく考えております。日本肩関節学会会員の皆様、今後もよろしくご支援を賜りたくお願い申し上げます。

理事　田中　栄

前期に引き続き日本肩関節学会の理事を務めさせていただくことになりました。私は 1987 年に東京大学医学部を卒業後、東京大学医学部附属病院、三井記念病院、東京逓信病院、武蔵野赤十字病院で主としてリウマチ・関節外科を専門分野として研鑽を積んできました。また 1999 年には半年間クリニカルフェローとして米国 Virginia 州の

Advanced Orthopaedic Centers に留学し、人工関節置換術を中心とした臨床に従事しました。その際に腱板損傷や変形性肩関節症や関節リウマチ肩病変などに対する人工肩関節置換術の手術を数多く経験いたしました。帰国後は東京大学医学部整形外科でリウマチ外科及び肩関節外科のチーフとして診療を行ってきました。

2020 年からは日本肩関節学会の広報担当理事としてニュースレターの作成に尽力してまいりました。今期は引き続き広報委員会担当理事としてニュースレターの充実に努めるとともに、ホームページのリニューアルによる会員・非会員への学会のアピールを行ってまいりたいと存じます。また用語委員会担当理事として、肩関節外科における用語の適正化も目指す所存です。

何卒よろしくお願い申し上げます。

理事　森原　徹

この度、日本肩関節学会理事を拝命させていただきました森原　徹です。身の引き締まる思いでございますが、本学会の発展のために全力を尽くす所存ですので、よろしくお願い申し上げます。

肩関節外科学の進歩・普及を進めていくために、本学会ではさまざまな委員会を組織し、運営が行われています。今回、わたくしは国際委員会、日本肩の運動機能研究会運営委員会を担当させていただくことになりました。

国際委員会では菅谷啓之理事長、三幡輝久委員長とともに本学会の国際交流がさらに促進されるように、努力を惜しまない所存です。国際的な肩関節学会との連携と協力体制がさらに進めばと思います。

肩関節疾患に対する治療では、手術療法に加えて保存療法であるリハビリテーションが重要です。日本肩の運動機能研究会では、多くの理学・作業療法士が参加し、肩関節疾患に対するリハビリテーションについて活発な議論が行われています。リハビリテーションは肩関節疾患の臨床成績を左右するため、当研究会の重要度は高まりつつあります。日本肩の運動機能研究会運営委員会では、2021 年に会則案が提示され、修正後、2023 年には運用できる体制にしたいと考えています。日本肩の運動機能研究会で発表されている理学療法士の研究についても、貴重なテーマが多く、論文化できる体制を構築できればと存じます。

今年は新代議員として 19 名の先生が新しく参画していただきました。9 名の理事とともに、協力連携を深め、本学会の発展にために運営に参画させていただきます。

本学会の伝統を基に、より一層の発展を目指していきたいと思っております。先生方のご支援ご協力のほど、よろしくお願いします。

監事　仲川喜之

2021 年 10 月 28 日の社員総会にて、日本肩関節学会の監事にご推薦いただき、2 年目の職務にあたります仲川喜之です。1983 年、奈良県立医科大学整形外科教室入局直後より、肩関節グループを主宰されていました尾崎二郎先生に師事し、1985 年本学会の前身であります日本肩関節研究会に入会させていただき、2022 年で 39 年の入会歴となり、私の整形外科人生は日本肩関節学会とともにあったと言っても過言ではございません。1988 年に現在勤務しております宇陀市立病院に赴任し 34 年になりますので、ほぼ全ての肩関節疾患の長期経過観察をすることができました。この間、学会活動といたしましては、主に肩甲帯部周囲の外傷に関するリサーチを行ってまいりました。肩関節周囲外傷の手術は研修医等、臨床経験の浅い整形外科医が執刀することが多いため、本来の手術方法の優劣より、手術手技の未熟さが治療成績を左右しているという問題や、術後経過観察期間が短いなどの問題より、本邦のみならず、国際的にもエビデンスレベルの高い発表論文が少ないなど多くの問題点が残されているように感じています。2016 年からは代議員を務めさせていただき、編集委員会にて雑誌肩関節の査読、編集業務にあたらせていただきましたが、残念ながら、やはり肩関節外傷論文の未熟さが気になりました。将来的には日本肩関節学会主導

にて外傷症例の集積を行い、肩甲帯部周囲外傷治療に関するエビデンスの発信がなされることを夢見ております。今後は林田賢治新監事とともに、日本肩関節学会の運営に貢献し、監査の職務を全うすべく努めてまいります。理事、代議員ならびに学会会員の皆様、どうぞよろしくお願いいたします。

監事　林田賢治

この度、日本肩関節学会の監事に就任させていただくことになりました。どうぞよろしくお願い致します。1985年に大阪大学を卒業し、大学病院および関連病院研修中に指導医であった米田稔先生と働く機会があり、学会発表をきっかけに1988年に日本肩関節学会に入会しました。その後、肩関節学会の多くの先生にご指導いただき、なんとか肩関節外科医として今日まで活動することができました。お世話になった先生方にこの場をお借りして御礼を申し上げたいと思います。2012年から評議員として学会の一助となるように働いてきましたが、これからは監事としてお役に立てれば幸いです。

監事の立場で述べることではないかもしれませんが、最近10年の学術集会で感じていることですが、以前（2000年以前）の学会と比較してすこし元気が無くなっているような気がします。最近でも、若手の先生（20－30代）の発表は多くされていますが、以前と比べて質問に立つ若手の先生が少なくなったような気がします。学会が成熟してきたのかもしれませんが、白熱した議論が若い先生方の間で繰り広げられる光景が少なくなってきた気がして、寂しく感じます。今後の学会の発展を考えると20～30代の先生が活躍し40～50代の先生を凌駕するぐらいの活躍を期待します。そのような雰囲気が、学会の活性化につながり、研修医の先生や医学生にとっても魅力的な学会になるような気がします。

具体的な方策は今後の課題ですが、理事の先生方と協力し、魅力的な発展する学会になるよう微力ながら貢献したいと思います。

日本肩関節学会　理事・監事

左から
北村歳男、伊﨑輝昌、田中　栄、橋口　宏、菅谷啓之、高瀬勝己、菊川和彦、森原　徹
理事　理事　理事　副理事長　理事長　理事　理事　理事

監事　左から
林田賢治、仲川喜之

新代議員あいさつ

代議員　石垣範雄

このたび、日本肩関節学会代議員に選出して頂きました北アルプス医療センターあづみ病院の石垣範雄です。私は、1998 年に信州大学を卒業し、2006 年より畑幸彦先生のご指導のもと肩関節外科の診療・研究を始めました。2013 年より現在のあづみ病院に移り、肩関節の診療、スタッフと研修医の教育、腱板断裂に対する Mini open repair 法の長期成績などの臨床研究などに日々励んでいます。これまで本学会の多くの先生方にご指導いただいたことが現在の診療の礎になっていると深く感謝しております。今後はこれまでご指導いただいた日本肩関節学会のますます発展に寄与できるよう精一杯精進していきたいと思います。何卒よろしくお願い申し上げます。

最後になりましたが、代議員選挙にあたりご推薦いただきました東京医科大学高瀬勝己先生、福岡大学筑紫病院伊﨑輝昌先生を始めご支援いただきました多くの先生方に厚く御礼申し上げます。

代議員　井上和也

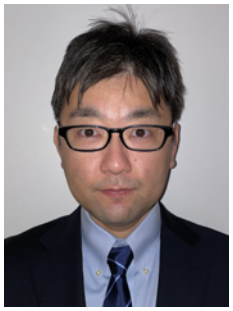
奈良県立医科大学　整形外科学教室の井上和也と申します。この度、日本肩関節学会の代議員に選任いただきました。

私は、2004 年に奈良県立医科大学を卒業し、奈良県立医科大学 整形外科学教室に入局いたしました。2009 年に肩関節外科医を志し、末永直樹先生の元に国内留学させていただき、約 2 年間の間 肩関節外科の臨床・研究に研鑽させていただきました。

当時、奈良県立医科大学内には肩関節を専門とする医師が不在でありましたため、2012 年に大学に帰学し、同僚とともに大学内に肩グループを立ち上げ、以後奈良県立医科大学において、臨床・研究・教育を行っております。

浅学非才な身ではありますが、肩関節外科および日本肩関節学会の発展に少しでも寄与できればと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

代議員　瓜田　淳



このたび、日本肩関節学会の代議員に選出していただきました瓜田淳と申します。

私は、2002 年 3 月に弘前大学医学部を卒業後、北海道大学整形外科に入局し、肩関節の診療に魅力を感じて肩関節外科医を志し、北海道大学整形外科で末永直樹先生、大泉尚美先生、船越忠直先生に師事して研鑽してまいりました。2021 年 4 月からは獨協医科大学整形外科に移りスポーツ診療班チーフとして診療・研究を行うと共に獨協医科大学病院スポーツ医学センター設立に携わっております。

日本肩関節学会には 2009 年に入会以降、学会発表、米国肩肘学会トラベリングフェロー（2018 年）、国際委員会（2019 年～）などの活動を通して肩関節外科医として育てていただいたと感謝しております。今後はこれまで以上に臨床、研究および後進の指導に励み、日本における肩関節外科の更なる発展に貢献できるよう尽力する所存でございますので、どうぞよろしくお願いします。

代議員　大木　聡

済生会宇都宮病院整形外科の大木聡（おおきさとし）と申します。このたび日本肩関節学会代議員に選出して頂きましたのでご挨拶申し上げます。

2007年に母校である慶應義塾大学の整形外科に入局させて頂き、上肢班として外傷分野を専門にしようと決めた私は、大学院では肩鎖関節の靭帯のバイオメカニクス研究を行いました。

肩鎖関節の外傷という分野から肩関節の世界に入りましたが、肩の分野では外傷治療においても骨の再建のみでなく、関節鏡を用いた腱板機能の再建や、リバース型人工関節といった新技術を用いることで結果が格段に変わる事を実感し、肩関節外科という学問そのものに興味をもちました。現在は救命救急病院で肩関節外傷の指導をしながら大学院の画像解析の研究の指導にあたっております。

若輩者ですが今後の肩関節学を進歩させていけるよう臨床・研究の面で精一杯尽力していく所存です。どうぞよろしくお願い申し上げます。

代議員　栫　博則

このたび、熊本整形外科病院　北村歳男先生、鹿屋体育大学　藤井康成先生に推薦人となっていただき、伝統ある日本肩関節学会代議員に選出していただきました天陽会中央病院整形外科の栫博則と申します。

私は1996年に鹿児島大学を卒業後、同整形外科に入局、2001年に肩関節学会（本学会）に入会させていただきました。医局の先輩である藤井康成先生のもとで肩関節の勉強を始めさせていただき、途中一年間は船橋整形外科の菅谷啓之先生にご指導頂きました。その後大学に帰学し、臨床とモーションキャプチャーを用いた腱板断裂肩の動態解析に従事し、谷口教授のもとで仕事をさせて頂いた後、2020年から現在の病院に勤務しております。

本学会の先生方には今まで様々な形でご指導いただき大変感謝しております。今後は微力ではありますが、お世話になってきた本学会の発展に貢献できるよう尽力していく所存です。ご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

代議員　梶田幸宏

このたび、日本肩関節学会の代議員に選出していただきました一宮西病院の梶田幸宏と申します。私は2004年愛知医科大学を卒業後、勤務していた名古屋第二赤十字病院において肩関節外傷患者の治療の難しさを経験し、また学生時代にバレーボールで肩関節の疼痛により満足にプレーできなかったことから、肩関節に興味を持ちました。2008年から岩堀裕介先生のご指導のもと肩関節疾患の診療に無我夢中で取り組み、2021年度までは愛知医科大学医学部整形外科教室で講師（肩肘関節グループチーフ）として臨床、研究を行ってきました。その後、2022年4月から一宮西病院整形外科の部長に着任し、肩関節センターを開設いたしました。今後も諸先輩方に少しでも追いつけるように研鑽を積み、その情報を国内外へ発信し続けたいと思います。まだまだ若輩者ではございますが、本学会の発展に貢献できるように精一杯邁進していきたいと考えておりますのでよろしくお願いいたします。

代議員　梶山史郎

この度、日本肩関節学会代議員に選出いただきました長崎大学病院整形外科の梶山史郎と申します。私は山口大学医学部を 1997 年に卒業後、同年長崎大学整形外科に入局いたしました。2008 年より長崎大学病院の肩関節グループに所属させていただき、現在同グループ責任者として、鏡視下手術や人工関節手術、肩周囲感染症などの診療にあたっています。また 2010 年より日本整形外科学会骨・関節術後感染予防ガイドライン策定委員会委員を拝命し、2015 年に発行された改訂第 2 版の作成に携わりました。現在も整形外科領域の術後感染予防を目指した基礎研究を行うとともに、周術期感染対策のエビデンスや手技についての啓蒙活動を行っています。今後は伝統ある日本肩関節学会のさらなる発展に寄与できる様尽力いたしますので、ご指導のほどどうぞよろしくお願いいたします。

代議員　川崎隆之

この度代議員に選出して頂きました順天堂大学の川崎隆之と申します。私は 1995 年に順天堂大学を卒業後、同整形外科教室に入局致しました。当初脊髄の再生に興味を抱き、京都大学大学院認知行動脳科学教室に国内留学して川口三郎教授の下で 5 年間勉強させて頂きました。その後大学に戻った折にはスポーツドクターを目指し、膝関節外科医として 4 年間黒澤尚教授に従事致しました。膝を中心に研鑽を積みながら、次第に肩関節脱臼で困っているアスリートに携わりたいと思うようになり、2008 年日本肩関節学会に入会致しました。今日までご指導頂きました皆様にはこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。自身は肩関節制動手術の成績向上、肩関節脱臼の画像・疫学・映像解析、頚椎・肩甲帯の動作・モデル解析に取り組んで参りました。まだまだ勉学が必要な身ではございますが、今後学会の発展に微力ながら貢献できればと考えております。皆様どうぞ宜しくお願い致します。

代議員　見目智紀

この度、横浜南共済病院整形外科山崎哲也先生、昭和大学藤が丘病院整形外科西中直也先生にご推挙頂き、伝統ある日本肩関節学会の代議員に選出していただきました北里大学の見目智紀と申します。私は 2002 年に千葉大学医学部を卒業し、千葉大学医学部整形外科学に入局致しました。大学院卒業後 2011 年より北里大学医学部整形外科学助教に就任させていただき、現在同講師並びに北里大学病院リハビリテーション科科長を拝命しております。元々肩関節の機能に興味があり、動作解析を中心に研究を行っておりましたが、現在は疼痛関連物質を主体とした肩関節の痛みの研究を主におこなっております。現在、肩の運動機能研究会運営委員会、雑誌「肩関節」編集委員会をいただいており、微力ながら貢献できる様に精一杯職務に邁進したいと存じます。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願いいたします。

代議員　新福栄治

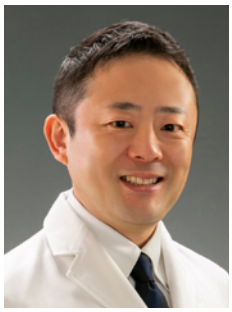
このたび、佐野博高先生と内山善康先生にご推薦人を賜り、伝統ある日本肩関節外科学会代議員に選出していただきました東海大学大磯病院 整形外科の新福栄治と申します。

私は1997年に東海大学医学部を卒業し入局後、故福田宏明名誉教授に師事し肩関節外科の道に進みました。現在は神奈川県西部を中心に肩関節外科の治療にあたっております。私はオープン手術と鏡視下手術の教育を受けたhybridとして、それぞれの良い点を活かすような治療を行ってまいりました。研究活動では肩関節領域に対するICTの可能性にも目をむけタブレット端末を用いたリハビリテーションの臨床研究のほか、凍結肩の疼痛に関する研究をおこなっています。日本肩関節外科学会にはこれまで学会発表や査読を通じて多くのことを学ばせていただきました。今後は、日本肩関節外科学会に恩返しできるように微力ながら精一杯頑張らせていただく所存でございます。何卒よろしくお願い申し上げます。

代議員　土屋篤志

この度日本肩関節学会の代議員に選出して頂きました土屋篤志と申します。私は1997年に名古屋市立大学を卒業し名古屋市立大学整形外科に入局しました。大学院生時代に大学病院の講師であった後藤英之先生の肩関節鏡手術に入らせて頂き、組織に糸を掛けたり、スライディングノットを用いて縫合したりと鏡視下にこんなことができるのかと感動しました。更に肩の治療は画像所見を治せばよいというものではなく、真の原因が肩以外にあることも多いため全身の機能も理解し正すことが重要と教えて頂き、奥が深い肩関節外科に興味を持ちました。2009年に名鉄病院へ赴任、名古屋スポーツクリニックの杉本勝正先生のご指導のもと肩関節の超音波、関節鏡、スポーツ傷害に関する臨床、研究に打ち込んでまいりました。今後も伝統ある日本肩関節学会の発展に貢献できるよう精一杯頑張らせていただく所存でございます。何卒よろしくお願い申し上げます。

代議員　寺林伸夫



この度、日本肩関節学会代議員に選出していただきました、岐阜大学整形外科の寺林伸夫と申します。私は2000年に愛知医科大学を卒業後、同年岐阜大学整形外科に入局し、整形外科医として研鑽を積んでまいりました。その中で特に肩関節疾患治療の難しさと奥深さを実感いたしました。2009年に船橋整形外科病院に国内留学させていただき、菅谷啓之先生の御指導の下、肩関節疾患診察の仕方、関節鏡手術手技、理学療法士や看護師・放射線技師など多職種との密な連携の重要性について学ばせていただきました。岐阜大学に戻ってからは、より多職種との連携を大切にして臨床活動を行い、研究では検査技師と連携し超音波を用いた腱板断裂患者の痛みと肩関節周囲血流の研究を行ってまいりました。今後は日本肩関節学会の活動に積極的に関与し、本学会と肩関節外科学の発展に貢献できるよう尽力する所存でございます。今後とも何卒よろしくお願いいたします。

代議員　徳永琢也

このたび、日本肩関節学会の代議員に選出していただきました徳永琢也と申します。

私は 2007 年に佐賀大学医学部を卒業し 2009 年に熊本大学に入局しました。学生の頃より野球に熱中し、投球動作や肩関節に興味を持ち、早くから肩関節外科医を志していたところ、幸いにも故井手淳二先生との出会いがあり多くの教えを頂きました。大学院では「成長因子を用いた腱板修復促進」をテーマとして動物モデルを用いた基礎研究を行い、臨床面では関節鏡視下手術を中心に研鑽を積んで参りました。現在、熊本大学病院で肩関節疾患の診療および手術を担当し、研究面では現在も大学院生と共に井手先生から受け継いだライフワークである腱板修復促進に関する基礎研究を継続しております。今後も臨床面、研究面共に自己研鑽を怠らず、肩関節疾患の診療、研究に日々励み、本学会の発展に貢献できるよう尽力致します。何卒宜しくお願い申し上げます。

代議員　長谷川彰彦

このたび日本肩関節学会代議員に選出していただきました大阪医科薬科大学の長谷川彰彦と申します。

私は 2002 年に大阪医科大学（現・大阪医科薬科大学）を卒業し、2008 年に本学会に入会させていただいてから、三幡輝久先生にご指導いただき肩関節外科医として研鑽を積んで参りました。主に腱板断裂に対する臨床研究及び動物モデルを用いた基礎研究に従事しております。

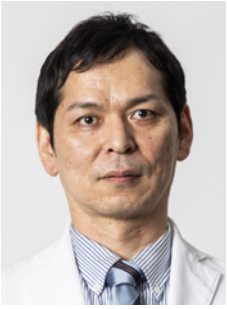
日本肩関節学会におきましては 2022 年の ASES トラベリングフェローに選出していただき、アメリカ各地を訪問させていただく機会をいただきました。今後は伝統ある日本肩関節学会が世界の肩関節外科をリードしていけるよう、微力ながら貢献したいと考えております。今後ともご指導ご鞭撻の程よろしくお願いいたします。

最後に、代議員選挙にあたり推薦人となっていただきました信原病院の乾浩明先生、東北大学の山本宣幸先生、ご支援をいただきました先生方に厚く御礼申し上げます。

代議員　松木圭介

このたび、代議員に選出頂きました船橋整形外科病院スポーツ医学・関節センターの松木圭介です。私は 1996 年に千葉大学を卒業した後、2001 年に肩関節外科医を志し日本肩関節学会に入会いたしました。以後、菅谷啓之先生をはじめとする千葉大学肩関節グループの先生方にご指導頂きながら肩関節診療に携わってきました。また、画像解析や動態解析などの研究にも継続して従事しております。二度の米国フロリダでの研究留学の機会を得たこともあり、これまでに多くの論文を公表してきました。2008 年には高岸直人賞を受賞しております。最近では高橋憲正先生のもと、臨床、研究の両面で後進の指導にも力を入れております。これまでの経験をもとに日本肩関節学会の発展に貢献できればと考えております。微力ではありますが、精一杯代議員として活動していく所存ですのでよろしくお願い申し上げます。

代議員　間中智哉



この度、伝統ある日本肩関節学会の代議員に選出していただきました大阪公立大学大学院医学研究科整形外科学教室の間中智哉です。

私は、2002 年に大阪市立大学を、2010 年に同大学院を卒業しました。その後、関連病院で研鑽を積み、2013 年より大阪市立大学大学院医学研究科整形外科学教室において、診療、研究に携わるとともに教員として学生や若手医師の教育に従事しています。また、2013 年にはフランスのサングレゴワプライベート病院の Philippe Collin 先生の元に留学し、欧州の肩関節外科について学ぶ機会を得ました。2022 年にダブリンで開催された SECEC/ESSSE では、Best Poster Prize を頂きました。今後も積極的な学会発表と活発な討論を行い、自身の一層の研鑽を積み、代議員として伝統ある日本肩関節学会を盛り上げていきたいと考えております。何卒、宜しくお願い申し上げます。

代議員　美舩　泰

この度、日本肩関節学会の代議員に選出していただきました美舩泰（みふねゆたか）と申します。2001 年神戸大学医学部を卒業し、関連病院での研修後に神戸大学大学院に進学。その後理化学研究所、ピッツバーグ大学にて腱の再生や腱骨付着部の修復に関する研究に取り組む中で、肩腱板治療に興味を持ち、帰国後、現在所属する神戸大学大学院整形外科に勤務し、ここで国分毅先生に薫陶を受け、肩関節外科を専門として診療に携わりました。地域におきましても、神戸に本拠地を持つ様々なプロ・アマスポーツチームの診療にも多く関わらせて頂き、小中学生を対象とした野球検診も主催しております。私がこれまでに経験させて頂いたことを、今後は肩関節外科医を目指す若い世代の先生方にも少しでも還元できればと考えております。

最後に、代議員選挙にあたりまして推薦人となって頂きました夏恒治先生、国分毅先生、ご支援頂きました全ての先生方に心より御礼申し上げます。

代議員　三好直樹

このたび、日本肩関節学会代議員に選出していただきました旭川医科大学の三好直樹でございます。改めまして代議員選挙で推薦人をお引き受け下さった北新病院末永直樹先生、鹿児島大学谷口昇教授、私の力不足でご期待に添えませんでしたが、2021 年に推薦人をお引き受け下さった熊本総合病院菊川憲志先生をはじめとする多くの先生方の多大なるご支援にこの場をお借りして深謝します。

私は、1999 年に旭川医科大学整形外科に入局し、2005 年に日本肩関節学会に入会致しました。肩関節外科医を目指し 2006 年当大学に戻りましたが、指導者が不在だったため末永直樹先生に師事を仰ぎながら肩関節部門を立ち上げ経験を積んできました。これまでは医療圏の広い道北・道東地区に土台を作ることに注力してきましたが、今後は後輩の育成や知見の発信、新たな知識・手技の獲得に貪欲に挑み日本肩関節学会の発展に貢献できるよう精進していきたいと思いますので何卒よろしくお願いします。

代議員　横矢　晋

この度、日本肩関節学会代議員に選出していただきました横矢晋と申します。私は1999年に広島大学を卒業後、同整形外科教室に入局し、2004年からは大学院生として大先輩である故安達長夫先生や奥平信義先生、望月由先生からのご指導を仰ぎながら肩関節の研鑽を積んで参りました。2006年には大学院時代の基礎研究の結果をまとめた「骨髄由来間葉系幹細胞を用いた腱板再生 - 組織評価と力学強度測定 -」の論文で名誉ある高岸直人賞（基礎）をいただきました。2010年に広島大学肩グループのチーフに就任して多くの大学院生を指導させていただき、2017年には当グループの中邑祥博先生が「保存治療を行った腱板断裂の疼痛関連因子 -MRIによる検討 -」の論文で高岸直人賞（臨床）を受賞しております。甚だ微力ではありますが、日本肩関節学会の発展に少しでも貢献させていただければ幸いです。今後とも宜しくお願い申し上げます。

第49回日本肩関節学会学術集会を終えて

第49回日本肩関節学術集会　会長　高瀬勝己
（東京医科大学　運動機能再建外科学寄附講座）

第49回日本肩関節学会を会長　高瀬勝己、第19回日本肩の運動機能研究会を会長　後藤英之のもと2022年10月7日、8日の2日間に神奈川県横浜市のパシフィコ横浜ノースにて現地参加として開催致しました。また、COVID-19流行を鑑みて本会の一部（会長講演、信原克哉メモリアル、招待講演、国際シンポジウム、KSES lecture、主題）を、学会終了後の10月25日から11月15日までの期間でオンデマンドにて配信致しました。学会参加者は、海外からの招待者7名、KSES参加者26名の国外参加者33名を含めた総計1,300名以上で、混乱なく無事に本会をCOVID-19流行前の通常学会と同様に終えることができたことを報告させて頂きます。学会開催2か月前にはCOVID-19の感染状況が悪化し通常開催が危ぶまれましたが、開催2週間前より劇的に感染状況が改善され学会前日の会長招宴、学会初日の全員懇親会を無事に開催することができました。また、海外招待者も当初の予定していた先生方に参加して頂くこともできました。ここにあらためて先生方ならびに学会運営に携わって頂きました皆様方に感謝申し上げます。

本会のテーマは「飛耳長目　ー知見から創造へー」と致しました。飛耳長目とは、「飛耳」は遠くのことを聞くことができる耳、「長目」は遠くまでよく見通す目を持ち合わせるという意味から、すぐれた情報収集能力があり深い観察力と鋭い判断力を備えることのたとえです。この観点で得られた様々な知見から新たな創造を生み、肩関節外科の新たな展開を導くことを念頭に様々なセッションを考えさせて頂きました。特に今回は、国際シンポジウムを2演題（肩鎖関節脱臼の病態と治療、上腕骨近位端骨折に対するAnatomical Hemi-・Total SAあるいはReverse SAの選択）設け、両演題共に座長は海外招待者、国内の各1名、講演者は海外招待者3名、国内2名とさせて頂き、国内外の立場から活発な討論をしていただきました。セッションは1時間30分と短い時間ではありましたが、過去2年強の期間に接触することが困難であった国外の考え方を肌で触れることができたのではないかと自負しております。また、KSESとの交流では、前および現会長の講演、KSES traveling fellow講演2演題、KSESからの39演題があり、彼らの肩関節に関する積極的な姿勢を実感させて頂きました。この姿勢は、日本肩関節学会も見習うべき点ではないかと痛感いたしました。主題は6演題とし、各演題に座長を2名でお願いし有意義な討論がなされたものと拝察いたしております。一方、運動機能研究会ではシンポジウム1題、combined session 1題、主題5題と肩学会同様に活発な討論をしていただきましたが、例年と比較して発表者および参加者共に低調であったことが残

念ではありました。両会共にCOVID-19感染の状況を配慮してポスターセッションを廃止し全員がスライド発表するショートトークと致しましたが、演題数の都合にて1時間に最大で11演題になってしまったことに関して座長ならび演者の先生方にはお詫び申し上げます。

特別講演として信原克哉メモリアルを畑幸彦先生にご講演して頂きました。学会創設期から現在に至るまでの信原先生のご活躍や在りし日のお姿を拝見し感涙にむせぶ思いでした。貴重な資料を提供して頂いたご家族の皆様、講演をしていただいた畑先生には感謝申し上げます。

本学会では私の恩師であるBurkhead先生に来日して頂いたのみではなく、2023年開催のICSES会長のCastagna先生、KSES会長のSang-Jin Shin先生、Zoom参加ではありましたが2024開催のGerman Orthopedic and Trauma Society会長のScheibel先生に参加して頂くことができました。これらの著明な先生方が私の主催する第49回学会に来日していただけたことを誇りに思っております。これらの先生方の講演やセッションでのディスカッションを聞き、学会に参加して頂いた先生方におかれましては国際学会への発表あるいは英語論文の作成の一助になったのではないかと思います。

最後となりますが、このような会を主催させて頂けたことにあらためて皆様方に御礼申し上げます。

第 51 回・第 52 回　日本肩関節学会学術集会のお知らせ

第 51 回日本肩関節学会

学術集会会長：今井晋二（滋賀医科大学整形外科教室）
開催日時：2024 年 10 月 25 日（金）～ 26 日（土）（予定）
開催場所：京都（国立京都国際会館）（予定）

第 52 回日本肩関節学会

学術集会会長：伊﨑輝昌（福岡大学筑紫病院　整形外科）
開催日時：2025 年 10 月 9 日（木）～ 11 日（土）予定）
開催場所：福岡（福岡国際会議場）（予定）

「肩関節外科医を志す人たちへ」―肩の魅力を語る

磐城中央病院　田畑四郎

1. 肩学に興味を持ったきっかけ

1970 年代初頭（1973 年）に 1000 床を超す大病院の整形外科を担当する事になり、外傷から変性疾患まで他種多様な疾患を扱う立場を担うことになった。

特に 1980 年代は第二次交通戦争と言われ、むち打ち損傷を含めた肩から上肢にかけての痛みを伴った疾患が多かった。

当然のことながら脊椎由来、関節由来の痛みであり、頸・肩周辺の愁訴が混然としている場合が多く、その境界領域が不明のことが多い。しかしながら肩由来の夜間痛が激しく、なんとか原因を突き止めようとした思いが強くなり肩学にのめり込むようになった。

東北大整形外科初代教授の三木威勇治は五十肩の日本のパイオニアであり、昭和 22 年 7 月（1947 年）に日本医書出版株式会社から出版された“五十肩”の単行本（図1）にその内容が詳細に述べられている。その後教室での肩学の研究は途絶えて、また私の不勉強のため肩疾患に対する検査方法も一から始めた次第である。今では見向きもされない関節造影所見に一喜一憂しながら肩関節内部を知るために必死であった。しかし鏡視下手術が導入されることによって腱板断裂の病態解明並びに治療方法が急速な進歩と発展をとげた。

以下診断と治療に難渋した具体的症例を提示する。腱板断裂の診断について完全断裂は兎も角、不全断裂についてはいまだ不明な点が見られる。E.A.CODMAN(1943 年）が不全断裂を4つに分類したのが嚆矢となり、その後ピンホール断裂が除外され関節面断裂、腱内断裂、滑液包面断裂の 3 分類が主流になった。この不全断裂の診断は、MRI の導入により容易に断裂形態を鑑別できるようになった。しかし治療については、自覚的に痛みが強い割に、この疾患に対する積極的な方法の報告が見られない。小生は多数例の観血的治療を含めて積極的な治療を試み、好成績を挙げた。

ここで不全断裂のうち独立した腱内断裂の診断と治療に苦労した症例を提示する。症例は 51 歳男性で、五十肩として他医で約 8 ヶ月間の保存的治療を受けていたが、肩痛改善せず当院で 1980.5 に手術施行した。術中所見で滑液包面、関節面などの腱板に断裂なく、触診でも異常なく、困り果てて棘上筋腱のやや薄い部分を紡錘形に試験切除した。術後に切除切片を圧迫したり、たわませたりした後にようやく写真のような腱内断裂を示した（図2）。切片切除後の棘上筋腱の滑液包面や関節包面には特別な異常所見も見られなかったため、側側縫合して閉創した。術後一時疼痛軽快したが理学療法途中で再び疼痛と拘縮が見られ、広範囲の腱板変性と考え、再手術を行った。手

術は棘上筋腱の 2/3 以上を切除してその欠損部を大腿筋膜片で補修して修復した。辺縁または関節面断裂を伴わない腱内断裂の診断と治療に苦慮した症例でした。（整形・災害外科 XXVI：9・1983.）

2. いわゆる 50 肩の俗称について

長年にわたり使われている 50 肩の俗称が、ISAKOS（井樋栄二委員長）の国際的な合意形成会議で、2015 年に凍結肩と拘縮肩 ISAKOS 分類として、国際学会で正式に採用された。凍結肩は自然治癒が一般的に流布していることと、取り扱う医師のこの疾患への安易な対応が、病院から接骨院などに患者さんを渡り歩かせ、治癒を困難にし、長引かせていることは反省すべきである。治療の早期解決の目安は痛みや拘縮に対する迅速な対応と考える。糖尿病の合併は常に念頭におかなければならない。凍結肩の早期の疼痛と拘縮に対しては、頸椎神経根（c5,c6）ブロックや局麻剤関節内注射下による徒手的マニピュレーションが効果的である。しかしながら長期にわたる運動器リハビリが必要なことは申すまでもないことであった。（肩関節第 18 巻 2 号 405-409,1994）

3. 肩疾患の治療で嬉しかったこと

練達の循環器の内科医が発作的前胸部痛や肩甲間部痛を有する狭心症として 5-6 年間内科的治療をしていたが改善しないため患者本人自ら、当科を受診してきた。受診時狭心症特有の前胸部痛と共に、軽度の頸椎伸展制限見られた。ミエログラフイー、デスコグラフイーなどの画像検索と共に、選択的神経根造影などにより症状の再現を認めたので頸性狭心症を推測した。責任椎間高位は、画像と共に椎間板造影時の痛みの再現性で決定した。内科医の反対を押し切っての手術は思い出深い。前方固定術を選択したが、術後経過は予定通りの結果で治癒した。文献上椎間板高位はC 6/7 が多い傾向を示したが小生の経験例でC 5/ 6が多かった。（整形・災害外科 XXV：10・1982）

4. 脊椎由来の肩症状について

キーガン型麻痺による肩関節前方挙上制限が挙げられる。うっかりすると見落とすこともある。具体的症例を提示する。57 歳、男、誘因なく肩痛、上肢痛、ツッパリ感あり。寝違い、頸椎神経根症として整形外科医の対症的処置を受けていた。筋力低下が見落とされていて、挙上も出来なくなり、緊急対応の必要を認めた。通常の頚椎症性神経根症でなく運動優位のキーガン型麻痺と診断し、脊椎専門医を紹介し即手術となった。術中所見では椎間孔部にヘルニア片がみられ、術後 2 か月で肩周囲筋の機能改善が見られた。

5. 肩学を志したきっかけや肩学臨床の苦悩や喜ばしかったこと

上述の症例の一部に凝縮されている。将来肩学を専攻する若い世代への提言は、内科など他科の専門領域でも垣根を超えて自分自身のオリジナルな考えで追及することが肝要であり、特に臨床では患者自身の痛みや愁訴を経時的に注意深く観察することに尽きると思う。

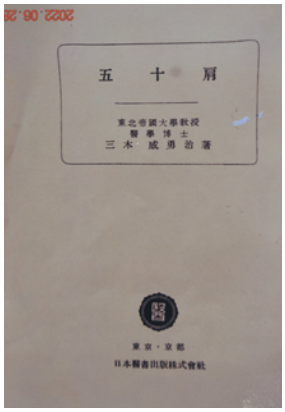


図 1. 単行本

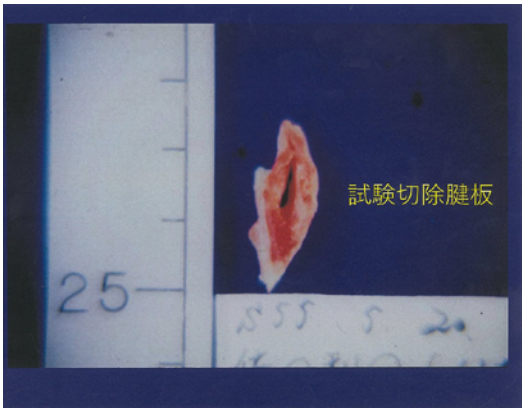


図 2. 腱内断裂

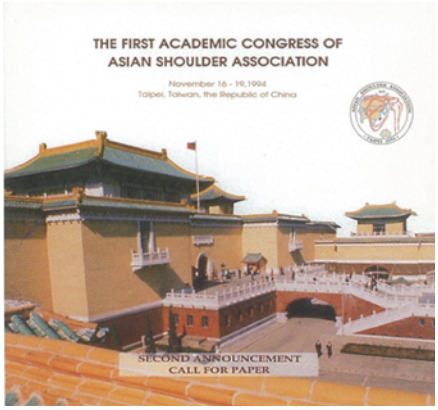


図 3. 故信原克哉先生の多大な尽力による第一回アジア肩関節学会（台北、J.JWU 会長）の学会場

図４. 学会終了後の観光。故髙岸直人、故信原克哉、故山本龍二先生、小生

図５. 学会後の参加者

学術論文紹介

第 35 回（第 48 回日本肩関節学会）高岸直人賞受賞　基礎論文

神戸大学大学院医学研究科　整形外科　篠原一生

Biochemical Markers of Aging (Advanced Glycation End Products) and Degeneration Are Increased in Type 3 Rotator Cuff Tendon Stumps With Increased Signal Intensity Changes on MRI
Shinohara I et al.
The American Journal of Sports Medicine. 2022 Jun;50(7): 1960-1970.

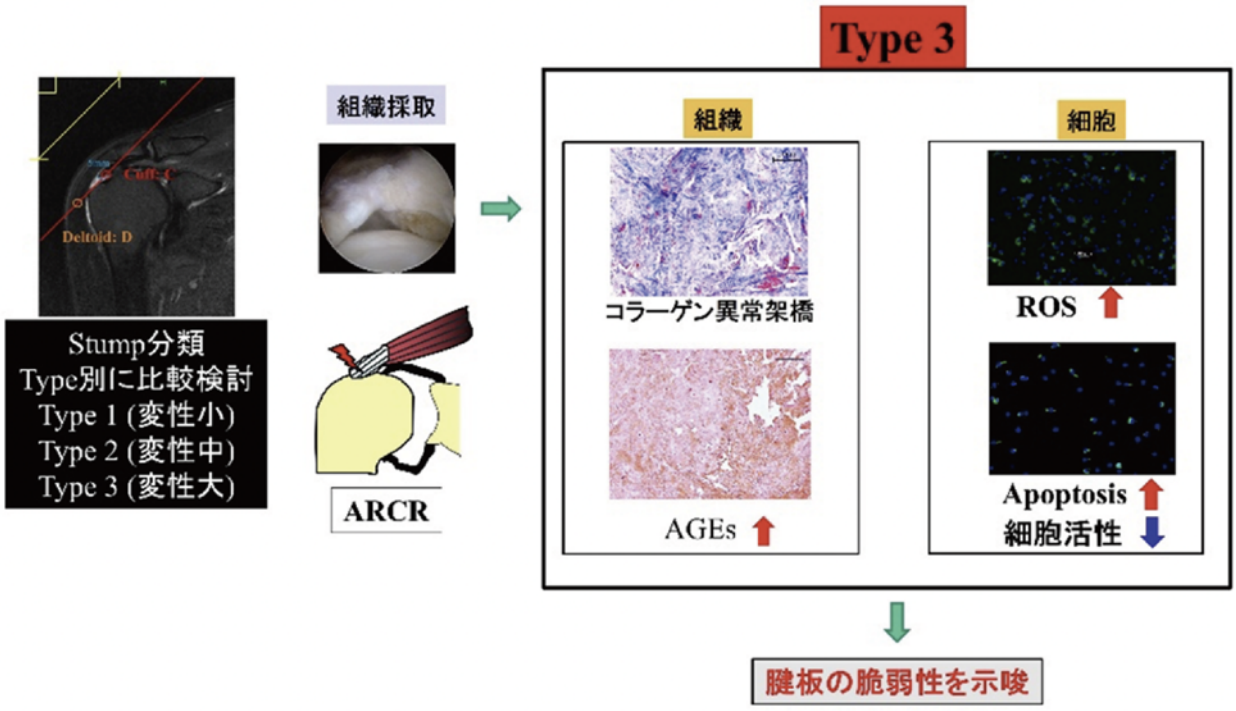
この度は栄えある高岸直人賞基礎論文部門を受賞しましたことを非常に嬉しく思います。そして、本賞選考委員会の先生方ならびに今回の選考にご尽力を頂きました全ての理事、代議員の先生方に心より御礼申し上げます。

本研究は近年腱板の脆弱性の指標として注目される stump 分類に関して、老化関連物質である Advanced glycation end-products (AGEs) との関連性を評価した研究です。AGEs は加齢や糖尿病で増加し、コラーゲン線維に蓄積することで異常架橋や酸化ストレスによる組織脆弱性をもたらすとされます。本研究では stump 分類の type 別に腱板断裂患者の腱板断端組織に対して組織学的評価 (HE 染色、Masson Trichrome 染色、免疫染色)

と細胞評価（細胞活性、ROS・Apoptosis 染色、qPCR）を行ない、AGEs による病態との関連性を検討しました。

結果として組織評価では stump 分類 type3 においてより高い AGEs 蓄積とコラーゲン線維の配向性の乱れを認め、細胞評価でも type3 において高い酸化ストレスおよび Apoptosis 発現を認めました。qPCR では type3 において有意に高い RAGE、NOX、IL、COL3 発現を認めており、高度の変性と炎症が示唆されました（図）。MRI の T2 脂肪抑制像では炎症や浮腫、変性を反映した評価が可能であり、stump 分類に基づく画像評価は、AGEs に関連した腱板断端部の変性および脆弱性を反映した評価ができる可能性があると考えます。

最後になりましたが、本研究を立案から執筆まで直接御指導を頂いた神戸大学の美舩泰先生、ならびに御助言を賜りました黒田良祐教授、国分毅先生にこの場をお借りして御礼申し上げます。



第 35 回（第 48 回日本肩関節学会）高岸直人賞受賞　臨床論文

慶應義塾大学　医学部　整形外科　古旗了伍

Risk factors of radiographic severity of massive rotator cuff tear

Furuhata R, Matsumura N, Oki S, Nishikawa T, Kimura H, Suzuki T, Nakamura M, Iwamoto T.
Scientific Reports. 2022 Aug 9;12(1):13567. doi: 10.1038/s41598-022-17624-y.

腱板広範囲断裂は病期が進行するにつれて、上腕骨頭の上方化、肩甲上腕関節の関節症性変化、上腕骨頭の圧壊等の画像変化が生じることが知られており、単純 X 線所見の分類として濱田分類が広く用いられている。しかし、これらの画像変化に影響を及ぼす因子は明らかとなっていない。本研究の目的は腱板広範囲断裂における X 線変化の進行因子を多変量解析により明らかにすることである。

MRI で 2 腱以上の完全断裂を有し、症状出現から 6 か月以上経過した陳旧性腱板広範囲断裂患者 210 肩を対象とした。同時期の単純 X 線所見から各症例を濱田分類 grade 1、2-3、4、5 の 4 群に分類した。目的変数は骨頭上方化（濱田分類 grade 2-3）、肩甲上腕関節症（濱田分類 grade 4）、骨頭圧壊（濱田分類 grade 5）とし、説明変数は年齢、性別、症状発症からの期間、外傷の有無、喫煙歴の有無、糖尿病・高血圧・関節リウマチの既往の有無、腱板断裂の部位、腱板構成筋の脂肪変性の有無、上腕二頭筋長頭腱断裂の有無、偽性麻痺肩の有無とし

た。単変量解析で有意な関連性を認めた変数のみを選択し、ロジスティック回帰分析を行った。

多変量解析で得られた骨頭上方化の危険因子は棘下筋腱断裂（OR = 3.51; P = 0.015）と上腕二頭筋長頭腱断裂（OR = 3.74; P = 0.007）であった。肩甲上腕関節症の危険因子は肩甲下筋上部線維断裂（OR = 3.23; P = 0.003）と上腕二頭筋長頭腱断裂（OR = 6.31; P < 0.001）であった。骨頭圧壊の危険因子は女性（OR = 10.30; P = 0.006）、肩甲下筋上部線維断裂（OR = 15.81; P = 0.006）であった。

本研究結果から、性別や断裂部位、上腕二頭筋長頭腱断裂の有無といった様々な因子が腱板広範囲断裂のX線変化に影響を及ぼしていることが明らかとなった。骨頭上方化には肩甲上腕関節の上下方向の安定性に寄与すると考えられている棘下筋腱や上腕二頭筋長頭腱の断裂が関与したのに対して、腱板断裂性関節症には前後方向の安定性に寄与すると考えられている肩甲下筋腱断裂が関与していた。

海外留学だより

山裏耕平　神戸大学大学院整形外科

自己紹介

神戸大学整形外科の山裏耕平と申します。この度は日本肩関節学会員の先生方に私の留学体験をご報告できる大変貴重な機会を頂戴し、心より感謝申し上げます。

まず私の簡単な自己紹介をさせて頂きます。2011 年に神戸大学医学部医学科を卒業し、2013 年に神戸大学整形外科に入局、その後神戸大学および関連病院にて後期研修を修了致しました。後期研修 2 年目に勤務した姫路聖マリア病院で、三谷誠先生のご指導の下、肩関節鏡による様々な手術症例を経験させて頂きました。肩関節外科と関節鏡に深い興味を持ち、将来肩関節外科医として活躍したいとの思いに至りました。2017 年に神戸大学大学院整形外科博士課程に進学し、幸いにも私の念願が叶い上肢グループに所属することができました。大学院時代は黒田良祐教授をはじめ肩関節学会代議員であります国分毅先生、美舩泰先生のご指導を頂戴し、肩関節の基礎研究ならびに臨床研究を行って参りました。2021 年博士号を取得後、幸いにもアメリカへの研究留学をする機会を頂き、2021 年 9 月より米国 Colorado 州 Vail にあります Steadman clinic / Steadman Philippon Research Institute (SPRI) に留学させて頂いております。

海外留学の契機

神戸大学整形外科では現在アメリカへ 7 名、スイスへ 2 名の先生方が留学されています。そのため、大学院時代より多くの諸先輩方が海外留学され、世界の舞台で活躍されるのを目にしてきました。英語を不得意としていた私は当初は海外への研究留学を自分なりの将来の計画に含めて考えていませんでしたが、Orthopaedic Research Society（ORS）や International Congress of Shoulder and Elbow Surgery（ICSES）での口演を経験することで自分の英語力のなさを痛感するとともにその必要性を強く感じるようになりました。幸いにも大学院卒業時に黒田教授よりアメリカへの研究留学の話を頂き、家族とも相談の上、アメリカ留学を決意しました。

Steadman clinic / Steadman Philippon Research Institute (SPRI)

私の留学先である Steadman clinic は Colorado 州 Vail に本拠を置く整形外科クリニックであり、Vail の他に Colorado 州 Frisco, Edwards, Aspen にもクリニックを展開しています。全米でもスポーツ整形外科分野が有名であり、著名なプロスポーツ選手を含めた世界中の患者が治療に訪れています（写真 1）。Microfracture technique を考案し、世界的に普及させた当病院の創設者である Dr. Steadman はすでに引退されましたが、股関節鏡の世界的権威である Dr. Philippon をトップとして、肩関節領域では Sports medicine の権威である Dr. Provencher、肩関

節外科医として著名な Dr. Millett らが在籍しています。2022 年度の日本肩関節学会と The American Shoulder and Elbow Surgeons (ASES) のトラベリングフェローでの見学施設ともなっており、大阪医科薬科大学の長谷川彰彦先生、北里大学の見目智紀先生が当病院へお越しになられました(写真 2)。3 日間と短い期間ではございましたが、お二人の先生方と Vail の山々のハイキングや食事をする機会もあり、久しぶりに日本人の先生方との貴重な時間を大変楽しく過ごすことができました。

写真 1: Steadman Clinic の外来

写真 2: Traveling fellow の先生方と Vail にて
(左 3 番目：見目先生、左 4 番目：長谷川先生)

私が所属しているのは病院ではなく Steadman clinic に併設された研究施設である SPRI になります。SPRI で行われた前臨床試験の結果を基に Steadman clinic にてさらなる臨床試験が行われており、臨床と研究が密に連携していることが特徴的です。世界最高峰の治療を患者に提供するという病院理念の下、SPRI では新たな臨床応用を目指して日々基礎研究が進められております。私のアメリカでの研究は肩関節を専門として行っているわけではなく、再生医療分野の権威である Dr. Huard のフェローとして研究を行っております。彼が Pittsburgh 大学に在籍していた頃より長年に渡り黒田教授、神戸大学と深い交流があり、2019 年より神戸大学から SPRI へ研究留学の派遣が正式に始まりました。現在は軟骨再生を主とし、新たな Biomaterial を用いた基礎研究を Northwestern 大学や Wisconsin 大学との共同研究を行っております。また研究に関しては、基礎研究に限らず屍体を用いた biomechanical study、臨床における outcome study など多岐に渡って行うことができるのが SPRI の最大の魅力であり、私も現在多くの研究に携わることができております。また日本と異なり屍体を用いた手術トレーニングが普及しているため、いつでも肩関節鏡手術の練習を行うことができます (写真 3)。

写真 3: キャダバートレーニング

海外留学の不安や苦労と留学後の変化

アメリカ留学が決まった際はコロナ禍の真っただ中でありました。留学先の SPRI では米国への研究留学で通常採用される J-1 ビザではなく、就労ビザである H1-B ビザが採用されているため、2020 年 6 月前トランプ大統領による H1-B ビザの新規発給を停止する大統領令により渡米時期は一時未定となりましたが、新バイデン大統領が新規発給を再開したことで、2021 年 8 月末に無事に渡米することができました。いざ渡米してみれば、幸いにして隔離や規制もなかったため日常生活における COVID-19 の影響を感じることはほぼありませんでした。

留学前に私が感じた最大の不安はやはり語学に関してです。やはり英語力の欠如は自分自身も感じていたところであり、渡米して 1 年が過ぎた今でも研究に関することだけでなく、日常生活の日々の会話でもいまだ苦労しています。私の場合は他施設との共同研究もあるため、オンラインミーティングもしばしばあるため多くの困難を経験します。そのような環境で研究を行っていくには信頼できる上司や同僚との良好な関係の構築に尽きると思います。私のような英語力が不十分な場合でも、彼らから多くのサポートを受けて私の研究は日々進むことができており、彼らには心より感謝しています。一方で、英語力があればより様々な領域での研究への発展の可能性があったと思いますので、今後留学を考えられている先生方は英語力の向上に努めることが望ましいと思います。病院に勤務し、緊急手術を含め多忙な生活を送っていると、勤務外の時間を英会話に費やすことは精神的にもなかなか困難であるとは思います。私の場合も同様でついつい先延ばしにしてしまいましたが、英語力の大切さは留学後日々痛感することになります。

家族の留学への反応と留学先での生活

私がアメリカ留学の話を頂いた時の家族の反応は幸いにも大変良きものでした。国際学会にて英語に対する劣等感を感じていた私を以前より妻は察しており、絶対に行くべきだと強く背中を押してくれたことを大変感謝しています。留学時に小学校 4 年生、2 年生、1 年生だった子供達も留学後の生活に大きな期待を持ってくれ、家も決まらぬまま家族総出で渡米しました。前任の先生のありがたい暖かいサポートを頂きながら、住居、自動車などアメリカでのセットアップを行ったのは良き思い出です。

留学先での生活に関しては、大変充実した時間を過ごすことができています。Vail が高級スノーリゾート地（写真 4）ということもあり、富裕層ばかりであるため治安も極めて良く、アメリカでの生活で想像するような危険を感じるような状況は皆無です。日本での生活と異なり、時間は比較的自由に調整が可能であるため、子供の学校や放課後の習い事の送迎、学校行事の参加、週末の家族旅行を含め家族に費やす時間をありがたいことに多く確保できており、家族とともに留学される先生方にとっては最大の魅力かもしれません。子供達の学校の友人家族も大変親切な方が多く、ディナーに招待してくれたり、お泊り会や誕生日会、ハロウィーンイベントを開いたりと、子供達は我々以上に適応力が高くアメリカでの生活を満喫しており、留学される先方の子供への心配は不要かと思います。

Colorado 州は近接した Utah 州や Arizona 州など多く国立公園を持つことも魅力で、休日には約 8 時間のロードトリップで様々な国立公園を訪れるなど余暇を楽しんでいます（写真 5）。また私は学生時代からバスケットボールをしており、Denver で NBA 観戦できることが嬉しく思います。特にプレーオフでの会場の盛り上がりは大変なものでした（写真 6）。Vail では 1 年のうち 11 月から 5 月初旬までゲレンデがオープンしており、病院からゴンドラまで徒歩 5 分の好立地のため、仕事前や昼休みに 1-2 時間ほどスキーを同僚と楽しむなど充実した生活を過ごしています。

経済面では、Vail が別荘地のため手頃な家賃の物件はほぼなくまず家探しが困難を極めます。また家賃を含めた物価が大変高くなっており、日本と大きな差を感じます。さらに急激な円安の状況も相高まり、経済的にはかなり大変であり、これは New York や Los Angeles、San Francisco などに旅行で訪れても同様の印象です。しかしながら、海外留学での経済的な困難をはじめ言語や生活の苦労は日本では体験することのできない大変貴重な経験であり、留学先での充実した時間はそれらに勝るものだと思います。

写真 4: Vail の街並みとスノーリゾート

写真 5: ユタ州アーチーズ国立公園

写真 6: NBA 観戦

さいごに

拙い文章にも関わらず、最後までお読み頂きありがとうございました。末筆ではございますが、この度留学の機会を頂きました神戸大学整形外科黒田良祐教授、このような留学便りを肩関節学会に寄稿する機会を頂いた肩関節学会広報委員会の北村歳男先生、新井隆三先生、国分毅先生に感謝申し上げます。

各委員会報告

雑誌「肩関節」編集委員会

委員長　佐野博高

雑誌「肩関節」編集委員会は、委員 30 名で構成される、日本肩関節学会の中で最も大きな委員会です。2022 年度から、北村歳男担当理事、筆者（委員長）、鈴木一秀副委員長、新たにご就任いただいた新井隆三副委員長という執行部体制で、鋭意編集作業に取り組んでまいります。

当委員会では、先日無事第 46 巻 1 号から 3 号を web 公開することができました。この場を借りて、論文をご投稿下さった会員の先生方、査読にご協力いただいた代議員、査読委員の先生方に、改めて厚く御礼申し上げます。今後は第 47 巻への投稿論文について査読・編集作業を進めて行く予定ですので、引き続きご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

さて、第 46 巻では、残念ながら 6 編の論文が不採用となってしまいました。雑誌「肩関節」では、論文の採否に関する最終判断は、委員全員が第 3 稿を慎重かつ厳正に評価した上で投票を行い、多数決で決定しています。今回不採用になってしまった 6 編の中には、もう一度修正していただければ採用できるのではないか、と思われる論文も多く含まれていました。こうした不採用論文につきましては、査読コメントを参考にもう一度ご修正いただき、次巻以降に改めて投稿していただければ、当委員会としては新たな論文として取り扱い、査読を行わせていただくことになっています。是非、ご検討いただければ幸いです。

最後に、雑誌「肩関節」委員会では、投稿者の利便性を向上させるために、投稿規定やチェック表を随時改訂しています。本誌に論文を投稿される際は、日本肩関節学会の web site（https://www.j-shoulder-s.jp/entryrule/index.html）で、最新の情報をご確認下さるようお願いいたします。

国際委員会

委員長　三幡輝久

2020 年以降、日本肩関節学会の国際交流事業は COVID-19 パンデミックの影響で中止されていましたが、このたび全てが再開いたしました。アメリカと韓国からの Traveling Fellow を受け入れて下さった先生には深く感謝いたします。

1. 2022 年度 ASES Traveling Fellow として大阪医科薬科大学の長谷川彰彦先生と北里大学の見目智紀先生がアメリカの著名な先生を訪問されました。

訪問施設

(1) Kerlan Jobe Orthopedic Clinic, (2) Orthopedic Biomechanics Laboratory (Prof. Thay Q Lee), (3) Stanford University, Steadman Clinic, (4) Baylor University, Rush University, (5) University of Pennsylvania, (6) Hospital for Special Surgery

2. 2022 年度 SECEC（ヨーロッパ肩肘学会）Traveling Fellow として東北海道病院の大野洋平先生が韓国の Traveling Fellow の先生（Dr. Hyun-Seok Song）とともにヨーロッパの国々を訪問されました。

訪問施設

(1) Royal Berkshire Hospital & Berkshire Independent Hospital (UK), (2) Reinier Haga Orthopedic Centre (Amsterdam), (3) Hopital de la Tour (Geneve), (4) Hospital Universitario Fundación Jiménez Díaz (Madrid), (5) 1st Orthopaedic Clinic, Istituto Ortopedico Gaetano Pini (Milan), (6) Istituto Humanitas -Rozzano (Milan), (7) Centre Hospitalier St Gregoire (Rennes), (8) ATOS Klinik Fleetinsel Hamburg GmbH & Co. KG (Hamburg)

3. 2022 年 9 月 に ASES Traveling Fellow（Dr. Lewis L. Shi、Dr. Stephanie Muh）が来日されました。

訪問施設

(1) 東北大学　山本宣幸先生、(2) 東京スポーツ&整形外科クリニック（明理会東京大和病院）　菅谷啓之先生、(3) 福井総合病院　山門浩太郎先生、(4) 京都下鴨病院　森大祐先生、(5) 大阪医科薬科大学　三幡輝久、長谷川彰彦先生

4. 2022 年 9 月 に KSES Traveling Fellow（Chris H. Jo 先生と Myung-Sun Kim 先生）が来日されました。

訪問施設

(1) 東北大学　山本宣幸先生、川上純先生、藍澤一穂先生、石津敦玄先生、(2) 東京医科大学　高瀬勝己先生、(3) 東京スポーツ&整形外科クリニック（明理会東京大和病院）　菅谷啓之先生、(4) 至学館大学　後藤英之先生、(5) 大阪医科薬科大学　三幡輝久、長谷川彰彦先生、(6) 神戸大学　美舩泰先生、(7) 丸太町病院　森原徹先生、古川龍平先生、木田圭重先生、(8) 広島大学　菊川和彦先生、(9) 鹿児島大学　谷口昇先生、(10) 福岡大学筑紫病院　伊崎輝昌先生、(11) 東京北医療センター　望月智之先生

5. 2023 年 KSES Traveling Fellow として、広島大学の原田洋平先生と大阪医科薬科大学の長谷川彰彦先生が選ばれました。2023 年 3 月に韓国の著名な先生を訪問されます。

6. 2024 年 ASES Traveling Fellow と 2024 年 SESEC Traveling Fellow の募集を 2023 年の日整会終了後に開始いたします。必ず貴重な経験になることは間違いありませんので奮ってご応募ください。

高岸直人賞決定委員会

委員長　船越忠直

第 35 回高岸賞受賞者として以下の二つの論文が決定いたしましたのでご報告申し上げます。

【基　礎】

篠原一生先生　（神戸大学大学院　医学研究科　外科系講座　整形外科）

『Stump 分類に基づく AGEs の腱板脆弱性への影響』

【臨　床】

古旗了伍先生　（慶應義塾大学　医学部　整形外科）

『腱板広範囲断裂における単純 X 線変化の進行因子』

第 49 回日本肩関節学会のベストアブストラクトとして以下の 16 演題が選ばれました。

【基　礎】

上原弘久先生　（順天堂大学大学院　医学研究科　整形外科　運動器医学）

「抗酸化剤は腱板修復部における腱骨間癒合を促進する」

鈴木貴之先生　（気仙沼市立病院 整形外科）

「腱板修復術における腱配列の不一致と脱神経が腱治癒に与える影響」

瀬戸貴之先生　（慶應義塾大学　医学部　整形外科）

「腱板断裂後、棘下筋はより早期かつ高度の筋変性を生じる」

藍澤一穂先生　（東北大学大学院　医学系研究科　医学部　整形外科学分野）

「Latarjet 法術後に肩甲下筋の機能は保持されるか?」

加藤達雄先生　（神戸大学大学院　医学研究科　外科系講座　整形外科）

「GlutaminaseI 阻害薬の腱板由来細胞への作用」

谷村峻太郎先生　（熊本大学病院　整形外科）

「加齢がラット腱板修復過程における腱前駆細胞動員に及ぼす影響」

江島健一郎先生　（社会保険田川病院　整形外科）

「腱板断裂モデルを用いた脂肪由来間葉系幹細胞移植の治療効果」

古川隆浩先生　（神戸大学大学院　医学研究科　外科系講座　整形外科）

「ヒト腱板由来細胞の三次元培養下での腱由来マーカーの発現解析」

【臨　床】

有野敦司先生　（東北大学大学院　医学系研究科　医学部　整形外科学分野）

「腱板断裂患者における脂肪化と筋萎縮－平均 6 年の前向き調査－」

稲垣健太先生　（千葉大学医学部附属病院　整形外科）

「反転型人工肩関節置換術後合併症に関する多施設研究」

川上純先生　（東北大学大学院　医学系研究科　医学部　整形外科学分野）

「症候性腱板断裂患者の関節軟骨の変化―平均 6 年の前向き研究―」

廣瀬毅人先生　（第二大阪警察病院　整形外科）

「Bankart 修復術後の関節窩前縁骨吸収と Glenoid Track の関係」

永瀬雄一先生　（東京都立多摩総合医療センター　整形外科）
「凍結肩に対するプレドニゾロン療法のランダム化前向き研究」
松村昇先生　（慶應義塾大学　医学部　整形外科）
「腱板修復が成功しても筋変性は回復しない」
田崎篤先生　（聖路加国際病院　整形外科）
「肩関節鏡手術の術前予備消毒法の評価 - 前向き無作為化比較試験」
設楽仁先生　（群馬大学大学院　医学系研究科　整形外科学）
「反復性肩関節脱臼における Proprioception 低下に伴う神経可塑性」

2022 年度　国際論文奨励賞

第 47 回日本肩関節学会からの使途特定寄付金を財源とする賞の設立を理事会より高岸賞委員会に諮問され、下記の先生が国際論文奨励賞として表彰されました。

高山 和政 先生　（倉敷中央病院　整形外科）

・Clinical outcomes and temporal changes in the range of motion following superior capsular reconstruction for irreparable rotator cuff tears: comparison based on the Hamada classification, presence or absence of shoulder pseudoparalysis, and status of the subscapularis tendon. J Shoulder Elbow Surg. 2021 Nov;30(11):e659-e675.

・Acromial and humeral head osteolysis following superior capsular reconstruction using autologous tensor fascia lata graft. J Shoulder Elbow Surg. 2022 Jul;31(7):1479-1487

・Ultrasound-guided interscalene block anesthesia performed by an orthopedic surgeon: a study of 1322 cases of shoulder surgery. JSES Int. 2021 Oct 12;6(1):149-154.

・An anatomical study for the location of suprascapular and spinoglenoid notches using three-dimensional computed tomography images of scapula. JSES Int. 2022 May 5;6(4):669-674.

長谷川 彰彦 先生　（大阪医科薬科大学　整形外科）

・Structural and Clinical Outcomes After Superior Capsule Reconstruction Using an at least 6-mm thick Fascia Lata Autograft Including the Intermuscular Septum. J Shoulder Elbow Surg. 2022 Aug 20;S1058-2746(22)00635-8.

・Histologic changes during healing with autologous fascia lata graft after superior capsule reconstruction in rabbit model. J Shoulder Elbow Surg. 2021 Oct;30(10):2247-2259.

・Relationship between the Hamada Grade and underlying pathological conditions in the rotator cuff and long head of biceps in symptomatic patients with rotator cuff tears. JSES Int. 2022 Feb 18;6(3):488-494.

芝山 雄二　先生　（札幌医科大学　整形外科）

・Reliability and accuracy of the critical shoulder angle measured by anteroposterior radiographs: Using digitally reconstructed radiograph from three-dimensional computed tomography images. J Shoulder Elbow Surg. 2022 Sep 5:S1058-2746(22)00663-2.

・Relationship between preoperative size of rotator cuff tears measured using radial-slice magnetic resonance images and postoperative rotator cuff integrity: a prospective case-control study. JSES Int. 2021 Dec 17;6(2):279-286.

・Diagnostic accuracy of magnetic resonance imaging for partial tears of the long head of the biceps tendon in patients with rotator cuff tears. JSES Int. 2022 Apr 4;6(4):638-642.

お忙しい中、高岸賞選考、ベストアブストラクト選定、国際論文奨励賞選定にご協力をいただいた、すべての先生に心からお礼を申し上げて、委員会報告と致します。

社会保険等委員会

委員長　望月智之

2022年10月6日に行われた第12回社会保険等委員会では　①「2021年度肩の手術アンケート」の結果　②2024年度診療報酬改定に向けた外保連収載案　について話し合いを行いました。アンケート結果において一部にデーターの不整合を認めたため、データーの再確認を行いました。外保連収載案では、1）烏口突起移行術　2）肩関節唇形成術（烏口突起移行術を伴う）（関節鏡下）を新たに申請することと致しました。

2022年11月16日に行われた第3回外保連手術委員会において、上記2術式の外保連試案収載が認められました。2024年度診療報酬改定では「肩腱板断裂手術（腱板断裂5㎝未満、関節授動術を伴う）（関節鏡下）」に上記2術式を要望する予定としております。外保連試案収載そして保険収載には実態調査としての肩の手術アンケートは大きなエビデンスとなります。あらためて肩手術アンケートにご回答いただきました学会員の先生方に深く御礼申し上げます。アンケート結果は2023年1月31日に日本肩関節学会HPの学会会員サイトに掲載を予定しております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

教育研修委員会

担当理事　菊川和彦　　委員長　後藤英之

今年度の教育研修委員会の活動内容について報告致します。
第14回教育研修会を第49回日本肩関節学会開催期間中に開催しました。学術総会は久しぶりの対面開催で行われ、早朝の開催にも関わらず本研修会にも多数のご参加を賜り誠にありがとうございました。講演のハンドアウトは学会ホームページの会員専用サイトから入手できるようにしていますのでご活用ください。

第14回教育研修会（会場：パシフィコ横浜ノース）

教育研修講演1：2022年10月8日（金）（日整会単位：1，6）

座　長：菊川和彦先生（マツダ病院　整形外科）
演題1：腱板断裂（cuff tear arthropathy 含む）の診断と治療
演　者：大泉尚美先生（北新病院整形外科）
演題2：肩関節周囲炎（五十肩、石灰沈着性腱板炎）の診断と治療
演　者：内山善康先生（東海大学整形外科）

教育研修講演2：2022年10月8日（金）（日整会単位：6，9）

座　長：菊川和彦先生（マツダ病院　整形外科）
演題1：肩の機能解剖、バイオメカニクス
演　者：船越忠直先生（慶友整形外科病院）
演題2：肩関節不安定症の診断と治療
演　者：山本宣幸先生（東北大学整形外科）

また、第6回日本肩関節学会キャダバーワークショップを2022年11月26日（土）、27日（日）に、名古屋市立大学先端医療技術イノベーションセンターにて開催致しました。参加者は関節鏡コース6名、切開手術人工関節コース6名の合計12名で、関節鏡視下手術、直視下・人工関節手術コースそれぞれ3テーブルずつ、6人の講師による手術手技の実習指導を行いました。また、2022年11月26日（土）18時00分から第6回肩関節疾患手術手技フォーラムを名古屋市立大学会議室（ＪＰタワー名古屋5階）にて開催し、講演会および企業展示を行いました。幸い、体調不良者やトラブルなどの発生なく無事終えることができ、参加者の皆様からは有意義であったとご好評をいただきました。

第6回キャダバーワークショップ・肩関節疾患手術手技フォーラム　講師

大泉尚美先生（北新病院整形外科）
菊川和彦先生（マツダ病院　整形外科）
後藤英之先生（至学館大学健康スポーツ科学科）
小林尚史先生（八王子スポーツ整形外科）
酒井忠博先生（トヨタ記念病院　整形外科）
船越忠直先生（慶友整形外科病院）（五十音順）

ワークショップの開催にあたっては、名古屋市立大学統合解剖学教室の皆様をはじめ、同整形外科学教室、運営事務局のNPO法人メリ・ジャパン様など、関係各位の皆様の多大なご協力、協賛を頂きました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。また、長きに渡り教育研修委員をお務めいただいた大泉尚美先生、船越忠直先生、誠にありがとうございました。

今後も教育研修委員会は会員の皆様の肩関節診療のお役に立てるよう、研修会やワークショップなどの教育活動を行って参ります。今後ともご指導、ご意見を賜りますようお願い致します。

学術委員会

委員長　藤井康成

学術委員会の活動報告としては、現在二つの研究企画に対して、web会議を通しての委員会内で活発な討論をおこなっております。

一つ目は、肩関節学会員を対象としました広範囲腱板断裂に対する手術療法に関するアンケート調査です。アンケート内容に関して理事会の承諾も得られ、2022年6月初旬に事務局より日本肩関節学会員に対してアンケートを発信し、7月終了時時点で350件近い回答を回収することができました。学会員並びに関係者の皆様には本調査に快くご協力を賜り、学術委員会より心より感謝申し上げます。

今後は 担当者によるアンケート調査の解析とともに、報告、論文作成など、委員会内で検討しながら調査を進めていく予定としております。

二つ目は、腱板脂肪変性の評価に関する調査です。調査内容としては、MRI画像におけるGoutallier分類の信頼性に関して、日本の肩関節外科医を対象に調査を行うことになりました。現在、MRI画像ファイルのデータ作成を行い、各サンプルの定量評価結果との整合性を評価すべく、データのファイリングを進めている段階です。本調査の最終的な目標としては、従来のGoutallier分類に幾つかの条件を設定することで、少しでもMRIによる腱板の脂肪変性評価の信頼性が向上させ、脂肪変性が腱板断裂の治療成績に与える影響を、より詳細に検討できる可能性が広がることを期待しております。

2022年10月より代議員数の増員に合わせて、新たなメンバーが加わり、総勢20名近い構成となりました。委

員長としては、力足らずのため、議事進行など取りまとめに少々不安がありますが、パワーアップした学術委員会として、少しでも興味ある調査を発案し実行できますよう、委員会一丸となって邁進していく所存であります。

今後とも学術委員会活動に対しまして、会員の皆様の益々のご厚情ならびにご協力を賜りますよう、何卒宜しくお願い申し上げます。

広報委員会

前委員長　北村歳男

＜2022年度活動報告＞

広報委員会の活動の使命は日本肩学会の最新の情報や委員会活動などを会員および一般の皆様にお知らせすることです。また肩関節学会には長い伝統と多くの魅力があり、会員の皆様に多くの肩関節学会の魅力をお伝えできるよう取り組んでいます。

日本肩関節学会ホームページの中にニュースレターとして掲載し年に2回作成しています。今回で19号となります。学会活動の情報のほか推薦する学術論文や海外留学記、先輩方のメッセージを連載として述べていただき、内容に工夫を進めているところです。

さらに情報伝達の効率性を高めるためにはホームページを見やすく、利用しやすく改善する必要があります。その改善には専門的知識が必要で、現在経験者や専門の意見を聞きつつ進行中です。また日々の運営が必要となるため、その運営方法や管理のシステム構築についても並行して検討が必要です。今年度は構成の委員の先生が入れ替わり、心機一転の心意気で活動に取り組む予定です。

＜2023年度活動予定＞

1. ニュースレターの年2回作成・発刊予定
2. ホームページの刷新の進行
3. ホームページの運営方法についての検討

財務委員会

前委員長　中川滋人

日本肩の運動機能研究会発足に伴う準会員1号・2号入会者の増加、髙岸直人賞口座からの借入金返済の完了、COVID-19禍による交換留学などの事業の中止、5-7月入会者からの年会費徴収などにより、本学会の財務は、ここ数年続いてきた危機的状況から脱却できつつありました。しかしながら、2022年に入ってからの急激な円安の進行により、JSES購読料の支払額が大幅に増加する見込みであり、再び悪化が危惧される状況にあります。

そもそも、正会員、準会員1号の年会費15,000円には、JSESオンライン購読料が含まれています。日本肩関節学会はJSESのcorresponding societyとして、全会員の購読が義務化されたため、2012年度より会員1人当たり年間50米ドルがElsevier社に支払われています。その際に、年会費が10,000円から15,000円に値上げされたわけですが、1ドル100円で計算された5,000円の値上げであったため、1ドルが100円より高くなるとその分、本学会の負担が増え実質の会費は目減りすることとなります。2021年度決算では、予測していた110円から136円へと26円の円安となった影響で、予算より126万円の支払い増加となりました。また、2022年度予算では円安のさらなる進行も考慮して、1ドル150円で計算しており、2021年度比約250万円の支払い増加が見込まれます。1ドル150円とすると、1会員あたりの差額2,500円を本学会が負担することとなりますが、現在の購読者数は約1,600人であり、年額400万円程度の持ち出しとなります。本学会の財政は決して大規模とは言えず、そのような支出が

続くと、新規事業を行う余裕はなくなってしまいます。今後このような円安が長期化すれば、年会費値上げを真剣に議論せざるを得ないと考えています。

役員・代議員の各種会議の Web 開催を更に推進するなど経費節減の努力をして参りますので、会員の皆様方に置かれましては、財務改善のため、身近におられる医師・コメディカルの方々の入会勧誘を積極的に行っていただけますよう、よろしくお願いいたします。

倫理・利益相反委員会

委員長　名越　充

今季はいくつかの話題、啓発事項、倫理委員会活動がありましたので報告します。

2022 年 5 月に眼科領域で医師が手術動画を医療医メーカーに提供し不適切な謝礼を受け取っていたことが報道されました。この不適切の意味は「動画活用目的のない販売促進目的での謝礼は景品表示法に基づく自主規制違反に該当する」ということであり、また患者や医療施設の同意取得も欠いていたことが問題となりました。そのため本委員会から肩関節学会会員に向けて注意喚起を行ないました。

7 月には学術委員会から MRI 画像を用いた研究についての倫理審査の申請がありました。WEB による委員全員での審査が行なわれ、条件付きで承認されました。

10 月には委員会構成に変更があり、担当理事の交代がありました。2022 年は 3 年に一度行われる 利益相反定期自己申告書を提出する年でした。10 月 28 日に事務局から対象者に提出依頼文が送付され、申告書の提出をしていただきました。

今後とも学会発表、論文作成、提出の際には倫理・利益相反に関しまして厳密な対応を宜しくお願いいたします。

定款等運用委員会

委員長　西中直也

2020 年度から正式に立ち上がった日本肩の運動機能研究会に関して、同年に日本肩の運動機能研究会会則（案）が 10 月の社員総会で承認されました。

2022 年度は日本肩の運動機能研究会会則（案）から正式な会則への変更を日本肩の運動機能研究会運営委員会と我々定款等運用委員会との間で審議に審議を重ね、10 月の社員総会にて承認予定でした。しかしながら、承認するにはさらに審議すべき項目があることが同総会にて指摘されました。具体的には、世話人会になるための条件に関わる項目の部分でした。これに関して 2023 年 5 月に開催予定の社員総会において承認されるべく委員内、そして日本肩の運動機能研究会運営委員会のメンバーと確認し、審議してまいります。

新代議員も増員され新しいメンバーにも加わる予定になっています。今回、日本肩の運動機能研究会会則（案）が承認されなかった反省も踏まえ、会では既存の規則等の改定や、新たな規則等の策定にしっかり対応していきたいと思います。どうぞよろしくお願い致します。

リバース型人工肩関節運用委員会

委員長　山門浩太郎

担当理事をお勤めいただいていた菅谷啓之先生の理事長就任を受けて、この度、菊川和彦先生が担当理事に就任されました。また、委員としても、寺林伸夫先生、間中智哉先生、栫博則先生に、新たにご参加いただきました。

一方で、高岸憲二先生と最上敦彦先生が委員会から退任されることとなりました。今期も、「RSA 講習会におけるガイドライン説明」と「ガイドライン逸脱症例あるいはガイドラインに記載のない症例の相談」を主軸とし、新メンバーで進めてまいります。

さて、前号（ニュースレター 18 号）にも記載しましたが、改定されたガイドラインにおいて誤解の多いポイントとして、手術の年齢要件があります。すなわち、以前は 70 歳以上に設定された使用制限が緩和されています（原則として 65 歳以上）。また、疾患によっては年齢要件を設定していないものもあります。たとえば、リウマチ肩や腫瘍などの特殊例に行う場合は特に年齢制限はありません。また、腱板断裂についても、再断裂症例といった他の手術方法での機能改善に困難が予測される症例における RSA の使用は「慎重に適応を検討する」ことが求められますが、65 歳未満であったとしても一律に「禁忌」とはなっておりません。最新版のガイドラインは日本整形外科学会会員専用サイトからダウンロード可能ですので、ご不明なところがあればぜひご確認ください。もちろん、判断に迷う場合は、肩関節学会事務局（office@shoulder-s.jp）あてに、該当の症例について症例検討等をおこなう形式のスライド（パワーポイントあるいは PDF）をご送付いただければ 1 週間から 10 日ほどで、委員会としての意見を返答しています。また、急性の上腕骨近位端3、4パート骨折症例についての相談は原則として日本骨折治療学会に設置されているリバース型人工肩関節運用委員会あてにお願いしていますが、骨折遺残変形や偽関節症例といった慢性病変についての相談は、以前とかわらず受け付けております。どうぞご遠慮なくご連絡ください。

日本肩の運動機能研究会運営委員会

前委員長　森原　徹

肩関節疾患に対する治療では、手術療法に加えて保存療法であるリハビリテーションが重要です。日本肩の運動機能研究会（以下研究会）では、多くの理学・作業療法士が参加し、肩関節疾患に対するリハビリテーションについて活発な議論が行われています。リハビリテーションは肩関節疾患の臨床成績を左右するため、当研究会の重要度は高まりつつあります。

2021 年、研究会世話人会が会則を起草し、2022 年 9 月に会則案が当委員会で承認され、定款等委員会に審議していただきました。その後理事会で確認され、2022 年第 49 回日本肩関節学会の社員総会で質疑を経ましたが、一部修正点が生じております。今後、当委員会で会則案の内容について再度審議を行い、定款等委員会、理事会、社員総会の審議・承認を受けたいと考えています。更に将来的に肩関節のリハビリテーションに関する知見を論文として、蓄積できる体制が日本肩関節学会内に整えられたらと思っております。

「理論と実践に基づいて肩運動機能を解明し、肩関節障害の評価・治療・予防の進歩及び普及を図ることとする。」という研究会の理念を遂行することが肩関節学の発展に寄与すると考えています。会員の皆さまのご理解・ご協力を今後ともよろしくお願いいたします。

選挙管理委員会

委員長　田崎　篤

2022 年度は、理事選挙、代議員選挙および第 52 回学術集会会長選挙を行いました。
以下の通り決しました。
・以下敬称略

＜第 52 回日本肩関節学会学術集会会長＞
　　学術集会会長選出規則 8 条

伊﨑輝昌（福岡大学筑紫病院）

＜理事＞

役員選出規則第８条　当選人決定該当者

伊﨑輝昌（福岡大学筑紫病院）

菊川和彦（マツダ病院）

北村歳男（熊本整形外科病院）

◎菅谷啓之（東京スポーツ＆整形外科クリニック）

田中　栄（東京大学）

〇橋口　宏（米倉脊椎・関節病院）

（五十音順、◎理事長　〇副理事長）

＜代議員＞

代議員選出規則第４条２推薦基準（1)-(3）該当者

石垣範雄（北アルプス医療センターあずみ病院）、井上和也（奈良県立医科大学）、梶田幸宏（一宮西病院）、梶山史郎（長崎大学）、土屋篤志（名鉄病院）、寺林伸夫（岐阜大学）、間中智哉（大阪公立大学）、美舩　泰(神戸大学)、瓜田　淳(獨協医科大学)、大木　聡(済生会宇都宮病院)、栫　博則(天陽会中央病院)、川崎隆之（順天堂大学）、見目智紀（北里大学）、新福栄治（東海大学付属大磯病院）、徳永琢也（熊本大学）、長谷川彰彦（大阪医科薬科大学）、松木圭介（船橋整形外科病院）、三好直樹（旭川医科大学）、横矢　晋（広島大学）、

（順不同）

以上

学術集会検討ワーキンググループ

前担当理事　岩堀裕介

2021年度中に、第48回日本肩関節学会（JSS）会長の岩堀裕介が作成した「第48回JSS、第18回日本肩の運動機能研究会（JSSFR）の開催の経験から」を学術集会運営マニュアルに加えてバージョンアップいたしました。

第49回JSS（会長:高瀬勝巳）・第19回JSSFR（会長:後藤英樹）については、当ワーキンググループと連携して、2022年10月7日（金）・8日（土）に、パシフィコ横浜ノースにて無事開催されました。COVID-19禍が続く中、高瀬・後藤会長の旗振りの元、海外講師も招いて、現地参加主体でほぼ元の形式に近い学術集会を開くことができました。これも、両会長をはじめとする学術集会の運営スタッフのご尽力と会員の皆様のご協力の賜物と思われます。

2022年度の本ワーキンググループメンバーは、担当理事および委員長：高瀬勝巳（前会長）、委員：池上博泰（現会長）、今井晋二（次期会長）、伊﨑輝昌（次々期会長）、岩堀裕介（前々会長）、アドバイザー：中川照彦により構成され、今後のJSS・JSSFR学術集会の運営について、各会長と連携を図って参ります。

尚、JSS・JSSFR学術集会の今後の開催予定については、第50回JSS（会長:池上博泰）・第20回JSSFR（会長:松村昇）は会期：2023年10月13日（金）・14日（土）、会場：京王プラザホテル、第51回JSS（会長：今井晋二）・第21回JSSFR（会長：永井宏和）は会期：2024年10月25日（金）・26日（土）、会場：国立京都国際会館、第52回JSS（会長：伊﨑輝昌）・第22回JSSFR（会長：未定）は会期：2025年10月10日（金）・11日（土）、会場：未定となっています。

50 周年史編纂委員会

委員長　国分　毅

日本肩関節学会 50 周年を迎えるにあたり 50 年史の公開は、第 51 回日本肩関節学会学術集会が開催される 2024 年 10 月に決定いたしました。今後、50 年史の掲載内容を委員会にて決定していく予定です。まずは、日本肩関節学会の 50 年を振り返って現在までの歴史を年表としてまとめたいと存じます。

会員の先生方には、御寄稿の依頼をさせていただくことがあるかと存じますが、何卒よろしくお願い申し上げます。

用語委員会

委員長　佐野博高

用語委員会は、これまで日本肩関節学会に医学用語の定義や正しい使い方について検討を行う委員会がなかったことを踏まえて、2022 年に発足した新しい委員会です。田中栄担当理事、今井晋二アドバイザーのご指導の下、委員 8 名の体制で、肩関節に関わる用語の検討に取り組んでまいります。

現在、当委員会では、最初の課題として、肩関節可動域測定法の改訂案作成に向けた作業を進めています。会員の先生方もご承知の通り、現行の「日本整形外科学会、日本リハビリテーション医学会制定・関節可動域表示ならびに測定法」には、椎体番号を用いた肩関節内旋可動域測定法や、肩関節屈曲 90 度（いわゆる 3rd plane）での内外旋角度測定法が収載されていないなど、実際の臨床に十分即していない点が複数みられます。今回の検討では、こうした表示・測定法の追加収載の可否について検討するとともに、すでに収載されている表示・測定法についても内容を再確認したいと考えています。作成した修正案については、会員の先生方から広くご意見を募った上で、日本肩関節学会による改訂案としてまとめていくことを目指しています。

さらに、2023 年 4 月からは、会員の先生方を対象に、定義や使用法について検討を要する医学用語の募集を開始いたします。ご応募いただいた用語の中から、当委員会で審議対象を選定し、調査・検討を行っていく予定です。また、当委員会における審議内容については、肩関節分野における正確な用語使用の促進に貢献できるよう、日本肩関節学会の web site やニュースレターなどを通して、会員の皆様に随時フィードバックしてきたいと考えています。会員の皆様におかれましては、以上のような当委員会の活動方針について、ご理解・ご協力を賜れれば幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。

日本肩関節学会　委員会一覧

2022 年 12 月 08 日現在

＜常設委員会＞

雑誌「肩関節」編集委員会

担当理事：北村歳男

委 員 長 ：佐野博高

副委員長：新井隆三　鈴木一秀

委　　員：石垣範雄　石毛徳之　糸魚川善昭　井上和也　大木 聡　梶田幸宏
川崎隆之　木田圭重　見目智紀　後藤昌史　塩崎浩之　設楽 仁　田中誠人
谷口 昇　寺林伸夫　徳永琢也　夏 恒治　二村昭元　八田卓久　松木圭介
間中智哉　三幡輝久　美舩 泰　三好直樹　村 成幸　山門浩太郎　山口 浩

アドバイザー：中川照彦　仲川喜之

国際委員会
担当理事：森原 徹
委 員 長 ：三幡輝久
委　　員：乾 浩明　糸魚川善昭　瓜田 淳　谷口 昇　高橋憲正　長谷川彰彦
二村昭元　松村 昇　松木圭介
アドバイザー：菅谷啓之

高岸直人賞決定委員会
担当理事：伊﨑輝昌
委 員 長 ：船越忠直
委　　員：新井隆三　乾 浩明　大泉尚美　大木 聡　菊川憲志　後藤英之　後藤昌史
高橋憲正　谷口 昇　中川滋人　夏 恒治　二村昭元　廣瀬聰明　山本宣幸
池上博泰（現会長）　今井晋二（次期会長）　高瀬勝己（前会長）
アドバイザー：髙岸憲二　玉井和哉

社会保険等委員会
担当理事：橋口 宏
委 員 長 ：望月智之
委　　員：菊川憲志　黒川大介　見目智紀　高橋憲正　田中誠人　名越 充　長谷川彰彦
廣瀬聰明

教育研修委員会
担当理事：菊川和彦
委 員 長 ：後藤英之
委　　員：相澤利武　内山善康　落合信靖　川崎隆之　国分 毅　小林尚史　酒井忠博
末永直樹　山崎哲也　山本宣幸　吉田雅人

学術委員会
担当理事：高瀬勝己
委 員 長 ：藤井康成
委　　員：乾 浩明　田崎 篤　石垣範雄　落合信靖　梶田幸宏　塩崎浩之　後藤昌史
水野直子　三幡輝久　三好直樹　山門浩太郎　横矢 晋　山本宣幸
アドバイザー：林田賢治　浜田純一郎　森澤 豊

広報委員会
担当理事：田中 栄
委 員 長 ：夏 恒治
委　　員：新井隆三　大前博路　栫 博則　梶山史郎　土屋篤志　西中直也　堀籠圭子
美船 泰　三宅 智　村 成幸　望月 由
アドバイザー：北村歳男

財務委員会
担当理事：橋口 宏
委 員 長 ：酒井忠博
委　　員：石毛徳之　国分 毅　佐原 亘　設楽 仁　中川滋人　村 成幸　横矢 晋
アドバイザー：岩堀裕介
外部アドバイザー：柄澤 徹

倫理・利益相反委員会
担当理事：北村歳男
委 員 長 ：名越 充
委　　員：新福栄治　鈴木一秀　田中 稔　水野直子　三宅 智
外部アドバイザー：柄澤 徹

定款等運用委員会
担当理事：伊﨑輝昌
委 員 長 ：西中直也
委　　員：糸魚川善昭　瓜田 淳　梶山史郎　田崎 篤　土屋篤志　橋本 卓
アドバイザー：柴田陽三　中川泰彰　森澤 豊
外部アドバイザー：柄澤　徹

リバース型人工肩関節運用委員会
担当理事：菊川和彦
委 員 長 ：山門浩太郎
委　　員：落合信靖　栫 博則　木村明彦　小林尚史　寺林伸夫　松村 昇　間中智哉
水野直子
アドバイザー：菅谷啓之　橋口 宏

日本肩の運動機能研究会運営委員会
担当理事：森原　徹
委 員 長 ：船越忠直
委　　員：内山善康　甲斐義浩　黒川大介　見目智紀　小林尚史　酒井忠博　佐原 亘
高村 隆　立花 孝　田中誠人　藤井康成　船越忠直　三好直樹　村木孝行
山口光國　山崎哲也
アドバイザー：岩堀裕介　中川照彦　浜田純一郎
オブザーバー：松村 昇（第 20 回日本肩の運動機能研究会会長として）

用語委員会
担当理事：田中 栄
委 員 長 ：佐野博高
委　　員：内山善康　鈴木一秀　田中 稔　八田卓久　三宅 智　望月智之
アドバイザー：今井晋二

＜特別委員会＞
選挙管理委員会
委 員 長 ：田崎 篤
委　　員 ：井上和也　大泉尚美　新福栄治　徳永琢也　橋本 卓　山口 浩

50 周年史編纂委員会
担当理事：菊川和彦
委 員 長 ：国分 毅
委　　員 ：大泉尚美　大前博路　菊川憲志　黒川大介　佐原 亘　設楽 仁　西中直也
　　松村 昇
アドバイザー：柴田陽三

＜ワーキンググループ＞
学術集会検討 WG
担当理事：高瀬勝己（前会長）
委 員 長 ：池上博泰（現会長）
委　　員 ：伊﨑輝昌（次々期会長）　今井晋二（次期会長）　岩堀裕介（前々会長）
アドバイザー：中川照彦

前理事長あいさつ

前理事長　池上博泰

2018 年 10 月から一般社団法人日本肩関節学会の理事長を拝命し、2022 年 10 月の秋の学会までの 4 年間の職責を全うし、菅谷啓之理事長に無事に引き継ぐことができました。これも一重に会員のみなさまからのご支援、ご協力の賜物であり、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。また実際に理事長として活動していく際に、4 年間私をささえてくれた副理事長の岩堀裕介先生、過去の経緯等について的確なアドバイスをくださった前々理事長の柴田陽三先生に心から感謝しております。

ちょうど 4 年前の 2019 年 1 月に発行されたニュースレター 11 号に私からのあいさつを掲載させていただきました。その中で、私の所信表明として、“定款にうたわれている「肩関節医学の進歩普及に貢献し、もって人類の福祉に寄与する。」という目的を遂行するために活動していくこと” を掲げました。

この 4 年間の活動について、大きく 3 点に絞って報告させていただきます。

1. 一般社団法人としての整備

日本肩関節学会は 1974 年に「肩関節研究会」として発足し、その後名称を、「日本肩関節学会」と変え、2014 年からは一般社団法人となり、法的にもその責任と義務が明確になりました。総会前に資料を送付して事前に確認をしていただくことで、総会での審議・報告がわかり易くスムーズに進むようにしました。ただ、これを実際に遂行することは非常にたいへんで、事務局である株式会社アイ・エス・エスの川村典子さまならびに公認会計士の柄澤徹先生にたいへんお世話になりました。この場を借りてあらためて感謝申し上げます。また代議員選出規則の第 8 条評価項目および評価基準に則って、6 年間での学会・学術活動を評価するために代議員の資格審査委員会を設立して、その評価を行うように開始しました。

2. 日本肩関節学会の国際化

日本肩関節学会の国際化は、井樋栄二初代理事長から目指していることであり、今までにも多くのことが提案され実行されてきました。

2019 年には 3 年に 1 回開催されている第 14 回国際肩肘関節学会（ICSES）が 9 月にブエノスアイレスで行われ、多くの会員の先生とともに参加しました。この ICSES で初めて各国の肩関節学会の理事長が一堂に会して、それぞれの現状や将来について語りあいました。日本からは地球の反対側にあるアルゼンチンという遠い国にも関わらず 40 名以上の会員の先生が参加され、日本肩関節学会のプレゼンスを示せたと思います。参加してくださった先生に感謝申し上げます。

さらに 2019 年 10 月にニューヨークで開催されたアメリカ肩肘関節学会（ASES)2019 は、日本が Guest Nation となっていたので、会員の先生とともに参加しました。こちらは日本肩関節学会学術集会の 1 週間前という厳しい日程にも関わらず、13 名の会員の先生が参加してくださり、熱い議論を交わすことができました。厳しい日程のなか、参加してくださった先生には感謝申し上げます。

ただ、2019 年 12 月に報告された新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染拡大に伴って、2020 年以降の人的交流はかなり滞ってしまいました。このような状況の中でも、2020 年に学術集会をハイブリッドで開催された末永直樹会長のおかげで、“国際論文奨励賞”が設置されました。また国際委員会をはじめみなさまのおかげで、一方通行であった ASES とのトラベリングフェローも双方向となり、2023 年には米国からのトラベリングフェロー2 名が来日しました。

3. 定款の変更

2014 年に定款が認証されてから、2016 年までに 2 回定款が変更されました。その後、私が理事長の間に 2019 年および 2022 年に定款を変更しました。

2019 年の変更は定款第 5 条会員の種別の変更です。以前から審議されていた学術集会時に併設されている“肩の運動機能研究会”と日本肩関節学会との関係ですが、名称を“日本肩の運動機能研究会”に変更して、日本肩関節学会の傘下として活動していくこと、および会員種別で準会員 1 号・2 号を設定することになりました。さらに、功労会員制度の設置に伴い、会員種別で功労会員が設定されました。

2022 年の変更は定款第 11 条代議員の変更です。代議員の定数が変更となりました。この理由は、会員数の増加ならびに各種委員会数および業務の増加に伴い、より多くの代議員が必要になったこと、毎年多くの代議員の応募があるにも関わらず代議員の定数の関係で採用できないのは日本肩関節学会にとって損失であることなどが理由です。定款にある肩関節医学の進歩普及に貢献して行くためには、代議員の業務は大変重要です。この定数の変更によって、より多くの会員の先生が代議員となり、一層活躍していただけたらと思っています。

昨年 10 月から、菅谷啓之先生が新理事長に就任され、日本肩関節学会のさらなる発展が期待されます。私同様に、会員みなさまのご支援を賜れますようよろしくお願い申しあげます。

私自身は、このニュースレターにもある通り、10 月に開催予定である第 50 回日本肩関節学会学術集会を新宿で開催させていただきます。多くの会員のみなさまのご参加をお待ちしております。

この 4 年間、あたたかいご支援を賜り、誠にありがとうございました。

第 50 回日本肩関節学会学術集会会長あいさつ

第 50 回日本肩関節学会学術集会 会長
東邦大学 医学部整形外科学講座 教授　池上博泰

この度、第 50 回日本肩関節学会学術集会を 2023 年 10 月 13 日（金）・14 日（土）の 2 日間、新宿の京王プラザホテルにおいて開催させていただきます。節目となる第 50 回目の本学会を主宰できることはこのうえない光栄であり、その責務と使命を重く感じております。本学会が実り多き学会となり、肩関節疾患・外傷の治療の更なる発展につながるよう誠心誠意努力してまいる所存です。

第 47 回、第 48 回本学会は、COVID-19 の感染流行により開催規模の縮小、形式の変更を余儀なくされました。第 49 回本学会は、現地での Face to face による開催とオンデマンド配信による開催でした。第 50 回はできる限り現地での Face to face を通常規模で行えるように、鋭意準備をしております。

今回の学会のテーマは “Standing on the shoulders of giants（巨人の肩の上に立つ）” としました。アイザック・ニュートンが同じ科学者であるロバート・フックへ当てた手紙の中で、（If I have seen further it is by standing on the shoulders of giants.）と書いて有名になったことばです。この起源は 12 世紀のフランスの哲学者であるシャルトルのベルナルドゥスのことばといわれています。

この 50 年の歴史の中で先人が作り上げてきた本学会の歴史を踏まえて、未来に目を向けた斬新な発想に基づく研究成果を自由に発表して討論していただける会となるように努めます。また、肩関節の治療には、リハビリテーションスタッフ、看護師との連携も極めて重要です。併設の日本肩の運動機能研究会を含め、メディカルスタッフの方々にも積極的にご参加いただき、若手整形外科医、リハビリテーションスタッフ、看護師にとってより一層魅力ある学会にしたいと考えています。

第 50 回日本肩関節学会学術集会が肩関節医学の進歩普及に寄与することで、広く社会の人々の健康に貢献できるような学術集会にしたいと思っています。ワクチンの普及によって現在のコロナ禍が落ち着き、リアルでの学会が開催できるように祈念しております。

肩関節を愛する多くの会員のみなさまのご参加をお待ちしております。

事務局からのお知らせ

2022 年 12 月に 2022 年度の年会費を郵送にてお送りさせていただきました。当学会の会期は、8 月 1 日～翌年 7 月 31 日になりますので、現会期は 2022 年度という少しわかりづらい設定になっておりますが、何卒、よろしくお願い申し上げます。

v

編集後記

広報委員会
西中直也

田中担当理事、北村前委員長、夏委員長をはじめとした広報委員の肩関節学会をおおいに盛り上げたい、との意気込みによりニュースレターに大きな改革が起こっています。これまでになかった「肩関節を志す人たちへ」－肩の魅力を語る、学術論文紹介、海外留学だよりなどが加わったことです。これらが加わったことで日本の肩関節外科の歴史を知り、現在の日本の肩関節の叡智を知り、世界の肩関節の現状を知ることができるようになりました。さらに 19 号では大幅に増員された新代議員の紹介、新理事の紹介も加わりボリューム内容共に充実したものになっていると感じています。今回、編集責任者だった小生は力不足で多くの先生にご迷惑おかけするなか、本号が発刊されるに至りました。この場をお借りして委員の皆さんにお礼申し上げます。今後ともよろしくお願い致します。

一般社団法人
日本肩関節学会
Japan Shoulder Society

編　集：　一般社団法人日本肩関節学会広報委員会
田中栄（担当理事）、夏恒治（委員長）、新井隆三、大前博路、栫博則、梶山史郎、土屋篤志、西中直也、堀籠圭子、美舩泰、三宅智、村成幸、望月由、北村歳男（アドバイザー）

発　行：　一般社団法人日本肩関節学会
〒 108-0073 東京都港区三田 3-13-12 三田 MT ビル 8 階株式会社アイ・エス・エス内
TEL03-6369-9981/FAX03-6369-9982
E-mail office@ shoulder-s.jp　　URL :https://www.j-shoulder-s.jp/